

堀坂地内遺跡

— 経営体育成基盤整備事業堀坂地区に伴う発掘調査 —

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第76集



2006

津山市教育委員会

は り さ か

堀坂地内遺跡

— 経営体育成基盤整備事業堀坂地区に伴う発掘調査 —

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第76集

2006

津山市教育委員会



堀坂地区遠景（東から）



堀坂地区遠景（北西から）



堀坂星ヶ坪遺跡全景（南東から）



坂ノ前遺跡出土縄文土器



坂田中遺跡出土縄文土器



堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器 1



堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器 2

序

津山市は岡山県の北部に位置しています。平成 17 年 2 月 28 日に周辺 4 町村（加茂町、阿波村、勝北町、久米町）との合併が行われたことにより人口は約 11 万人となり、新津山市として新たな一歩を踏み出したところであります。合併により遺跡の数も膨大な数にのぼり、現在 2,000 以上の遺跡が存在します。遺跡は弥生時代の沼遺跡をはじめ縄文時代から近世まで幅広くみられます。

発掘調査は経営体育成基盤整備事業堀坂地区の実施に先立ち、津山市が岡山県美作県民局の委託を受け、平成 14 年度から 16 年度にかけて実施したものです。

調査の結果、津山市内では数少ない縄文時代の遺跡のほかに、弥生時代から中世に至るまで幅広い時代の遺跡が存在することが明らかになりました。特に縄文時代の土器については、津山市内ではこれまで例をみないほどの出土量となりました。

本書はこれらの発掘調査の記録をまとめた報告書です。小冊子ではありますが、地域の歴史研究の一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成に至るまでご理解とご協力をいただきました関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成 18 年 3 月 31 日

津山市教育委員会

教育長 神崎 博彦

例　　言

1. 本書は経営体育成基盤整備事業堀坂地区にともなう堀坂耕整遺跡ほか7遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は岡山県美作県民局の委託を受け、平成14年度から16年度にかけて津山市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は津山市教育委員会　津山弥生の里文化財センター安川豊史、豊島雪絵が担当した。
4. 本書の執筆は行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、豊島雪絵がおこなった。執筆分担は本文末に記した。編集は平岡、豊島がおこなった。
5. 本書の自然科学的分析については、環境考古研究会に依頼した。
6. 本書に用いた方位は第V平面直角座標系の北で、レベル高は海拔高である。
7. 本書第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行5万の1（津山東部）地形図を複製したものである。
8. 遺跡の全体図および遺構図に示した遺構名は、下記のとおり省略して記載した。
堅穴住居：住　建物：建　土坑：土　袋状土坑：袋　柱穴：P
9. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（津山市沼600-1番地）に保管している。
10. 本書の総てのデータはPDF形式で保管している。

目 次

I.	調査の位置と周辺の遺跡	1
II.	調査経過	5
1.	調査に至る経過	5
2.	調査経過	5
3.	調査体制	6
III.	発掘調査の概要	9
1.	堀坂耕整遺跡	9
2.	堀坂橋ノ元遺跡	17
3.	堀坂宮ノ前遺跡	21
4.	堀坂田中遺跡	27
5.	堀坂大高下遺跡	33
6.	堀坂星ヶ坪遺跡	39
7.	堀坂南ノ前遺跡	63
8.	堀坂節分田遺跡	67
IV.	まとめ	79
1.	堀坂地区における集落形成の変遷	79
2.	堀坂地内遺跡出土の縄文土器について	82
	自然科学的分析	87
	堀坂星ヶ坪遺跡・堀坂田中遺跡の環境考古学分析	87

挿図・表目次

第1図 調査の位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)	2
第2図 発掘調査位置図 (S=1:5,000)	7
第3図 堀坂耕整遺跡全体図（上：B地区 下：A地区） (S=1:200)	10
第4図 袋状土坑 (S=1:40)	11
第5図 建物1～3 (S=1:80)	12
第6図 積穴住居1、2 (S=1:80)	13
第7図 土坑1～4 (S=1:80)	14
第8図 堀坂耕整遺跡出土遺物 (S=14)	15
第9図 堀坂橋ノ元遺跡全体図 (S=1:100)	18
第10図 堀坂橋ノ元遺跡出土遺物 (S=1:4, 1:2)	19
第11図 堀坂宮ノ前遺跡全体図 (S=1:150)	22
第12図 横列 (S=1:80)	22
第13図 堀坂宮ノ前遺跡包含層出土遺物1（土器） (S=1:3)	23
第14図 堀坂宮ノ前遺跡包含層出土遺物2（土器・土製品） (S=13, 1:4)	24
第15図 堀坂宮ノ前遺跡出土遺物3（石器） (S=2:3)	25
第16図 堀坂田中遺跡全体図 (S=1:400, 1:200)	28
第17図 道構平面図・断面図 (S=1:80, 1:40, 1:20)	29
第18図 堀坂田中遺跡出土遺物1（縄文土器） (S=13)	30
第19図 堀坂田中遺跡出土遺物2（弥生土器） (S=14)	31
第20図 堀坂田中遺跡出土遺物3（石器） (S=12, 23)	31
第21図 堀坂田中遺跡出土土器4（中世土器） (S=1:4)	31
第22図 堀坂大高下遺跡全体図 (S=1:80)	34
第23図 積穴住居1、2 (S=1:80)	35
第24図 溝1、2 (S=1:40)	36
第25図 堀坂大高下遺跡出土遺物1（弥生土器・須恵器・鉄器） (S=1:2, 1:4)	37
第26図 堀坂大高下遺跡出土遺物2（中世土器） (S=1:4)	37
第27図 堀坂星ヶ坪遺跡調査区割図 (S=1:1,000)	39
第28図 堀坂星ヶ坪遺跡調査区グリッド図 (S=1:1,000)	40
第29図 堀坂星ヶ坪遺跡全体図 (S=1:400)	41
第30図 堀坂星ヶ坪遺跡B・C・D地区全体図 (S=1:200)	43
第31図 堀坂星ヶ坪遺跡A地区全体図 (S=1:200)	45
第32図 縄文土器の出土分布図 (S=1:1,000)	46
第33図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器1 (S=13)	47
第34図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器2 (S=13)	48
第35図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器3 (S=13)	49
第36図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器4 (S=13)	50

第37図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器5 (S=13)	51
第38図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器6 (S=13)	53
第39図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器7 (S=13)	54
第40図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器8 (S=13)	55
第41図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器9 (S=13)	56
第42図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器10 (S=13)	57
第43図	堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器11 (S=13)	58
第44図	堀坂星ヶ坪遺跡A地区出土石器 (S=23、12、14)	59
第45図	堀坂星ヶ坪遺跡B地区出土石器 (S=23、12、13、14)	60
第46図	堀坂星ヶ坪遺跡C地区出土石器 (S=23、12、13)	60
第47図	堀坂南ノ前遺跡全体図 (S=1200)	63
第48図	建物1、2 (S=180)	64
第49図	堀坂南ノ前遺跡出土遺物（中世土器）(S=14)	65
第50図	堀坂節分田遺跡全体図 (S=1200)	68
第51図	建物1、2 (S=180)	69
第52図	建物3、4、5 (S=180)	70
第53図	土坑1～3 (S=140)	71
第54図	堀坂節分田遺跡出土遺物1（縄文土器）(S=13)	71
第55図	堀坂節分田遺跡出土遺物2（弥生土器・土師器・須恵器）(S=14)	72
第56図	堀坂節分田遺跡出土遺物3（鉄器）(S=12)	73
第57図	堀坂節分田遺跡出土遺物4（中世土器）(S=14)	74
第58図	堀坂節分田遺跡出土遺物5（中世土器）(S=14)	75
第59図	堀坂節分田遺跡出土遺物6（中世土器）(S=14)	76
第1表	発掘調査経過	5
第2表	堀坂地内遺跡消長表	79
第3表	縄文後期後葉土器編年対照表	85
堀坂宮ノ前遺跡出土縄文土器観察表		97
堀坂田中遺跡出土縄文土器観察表		97
堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器観察表1		97
堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器観察表2		98
堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器観察表3		99
堀坂節分田遺跡出土縄文土器観察表		99

写真図版目次

巻頭カラー1

堀坂地区遠景（右が北）

巻頭カラー2

上：堀坂地区遠景2（北西から）

下：堀坂星ヶ坪遺跡遠景（左は加茂川）

巻頭カラー3

上：堀坂宮ノ前遺跡出土縄文土器

下：堀坂田中遺跡出土縄文土器

巻頭カラー4

上：堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器1

下：堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器2

図版1

堀坂耕整遺跡調査区遠景（西から）

同・調査区全景（上がA地区）

同・A地区遺構全景（南東から）

図版2

堀坂耕整遺跡B地区遺構全景（南東から）

同・建物1（北から）

同・建物2（北西から）

図版3

堀坂耕整遺跡建物3（北東から）

同・堅穴住居1・袋状土坑1（写真上側）（北東から） 同・土坑1、2、4（北東から）

同・堅穴住居1完掘状況（西から） 同・土坑1土層断面（西から）

図版4

堀坂耕整遺跡堅穴住居2（北東から）

図版5

堀坂耕整遺跡土坑1完掘状況（南から）

同・土坑4（北東から）

同・作業風景

図版6

堀坂耕整遺跡出土遺物1

堀坂耕整遺跡出土遺物2

図版7

堀坂橋ノ元遺跡調査区全景1（南から）

同・調査区全景2（北東から）

同・弥生時代包含層（南から）

図版8

堀坂橋ノ元遺跡包含層断面（南から）

同・時期不明の土坑（北から）

同・堀坂橋ノ元遺跡出土遺物

図版9

堀坂宮ノ前遺跡調査区遠景（北から）

同・調査区全景1（上が東）

同・調査区全景2（南から）

図版10

堀坂宮ノ前遺跡ピット検出状況（西から）

同・焼土面（写真中央部）

同・柵列（西から）

図版11

堀坂宮ノ前遺跡出土縄文土器1

堀坂宮ノ前遺跡出土縄文土器2

図版12

堀坂宮ノ前遺跡出土弥生土器・土製品

図版13	図版14
堀坂田中遺跡調査区遠景（北から）	堀坂田中遺跡溝1（北西から）
同・縄文前期土器出土状況	同・溝2（北西から）
同・建物1、2（西から）	同・建物1（南西から）
図版15	図版16
堀坂田中遺跡建物2（南西から）	堀坂田中遺跡土坑2検出状況（南西から）
同・建物3（南西から）	同・土坑2掘削状況（同上）
同・土坑1（南西から）	同・作業風景（東から）
図版17	図版18
堀坂田中遺跡出土縄文土器	堀坂大高下遺跡調査区全景1（南西から）
堀坂田中遺跡出土弥生土器・中世土器	同・調査区全景2（北東から）
	同・堅穴住居1（北東から）
図版19	図版20
堀坂大高下遺跡堅穴住居1中央穴（南から）	堀坂大高下遺跡出土弥生土器
同・堅穴住居2（南から）	堀坂大高下遺跡出土須恵器・鉄器
同・堅穴住居2焼土面（西から）	堀坂大高下遺跡出土中世土器
図版21	図版22
堀坂星ヶ坪遺跡遠景（東から）	堀坂星ヶ坪遺跡A地区溝1、2（北から）
同・調査区全景（右がA地区）	同・A地区溝3（北東から）
同・A地区全景（左がB地区）	同・B地区北半部（右がA地区）
図版23	図版24
堀坂星ヶ坪遺跡B地区南半部（上がD地区）	堀坂星ヶ坪遺跡C地区全景（左がB地区）
同・B地区南端縄文土器集中出土地点（南東から）	同・C地区東端（南から）
同・B地区7区～9区基盤層の河原石（北から）	同・C地区谷部土層断面（西から）
図版25	図版26
堀坂星ヶ坪遺跡D地区全景（右がB地区）	堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器1（外面）
同・D地区全景（南東から）	同上（内面）
同・B地区東壁2b～2c層土壤サンプル採取状況	
図版27	図版28
堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器2	堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器4
堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器3	堀坂星ヶ坪遺跡出土縄文土器5

図版29	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器6	図版30	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器8
	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器7		堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器9
図版31	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器10	図版32	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器12
	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器11		堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器13
図版33	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器14	図版34	堀坂南ノ前遺跡調査区全景（北から）
	堀坂星ヶ坪遺跡出土繩文土器15		同・調査区全景（西から）
			同・建物・溝（西から）
図版35	堀坂南ノ前遺跡建物・溝（北西から）	図版36	堀坂節分田遺跡遠景（西から）
	同・建物（南東から）		同・調査区全景（右が北）
	堀坂南ノ前遺跡出土遺物		同・調査区全景（北から）
図版37	堀坂節分田遺跡溝2（西から）	図版38	堀坂節分田遺跡建物跡（東から）
	同・溝5（北西から）		同・建物1（南東から）
	同・建物跡（南東から）		同・建物3（南東から）
図版39	堀坂節分田遺跡溝1（南東から）	図版40	堀坂節分田遺跡出土遺物1
	同・土坑1（北から）		堀坂節分田遺跡出土遺物2
	同・土坑2（東から）		
図版41	堀坂地内遺跡出土石器1（表）	図版42	堀坂地内遺跡出土石器2（表）
同上	（裏）	同上	（裏）
図版43	堀坂地内遺跡出土石器3	図版44	堀坂田中遺跡分析試料
	堀坂地内遺跡出土鉄器		堀坂星ヶ坪遺跡分析試料No.1
			堀坂星ヶ坪遺跡分析試料No.2

第 I 章 調査の位置と周辺の遺跡

1. 調査の位置と周辺の遺跡（第1図）

調査地は、津市北東部、堀坂地区である。地区的中心は周囲を山々に囲まれた北西から南東に伸びる平野部である。地区の中央を吉井川に注ぐ加茂川がやや蛇行しながら南流する。

堀坂地区の周辺域には、縄文時代から中世までの遺跡が存在する。特に、堀坂地区から南へ約25kmのところには、草加部工業団地の造成に伴って調査された弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数存在する。

縄文時代の遺跡としては、穴田遺跡、東蔵坊遺跡B地区がある。遺構は発見されていないが縄文時代早期および後期の縄文土器片が出土している（今井1972、安川1981）。

弥生時代になると、加茂川右岸で集落の形成がはじまる。穴田遺跡で堅穴住居や貯蔵穴などがみられる（今井1961・62）、やや南の緑山丘陵上に位置する緑山北遺跡（行田・平岡1994）や緑山遺跡（中山1986）でも小規模であるが中期の堅穴住居などがみつかっている。また、草加部工業団地内の集落遺跡としては鮒込遺跡、福荷遺跡、東蔵坊遺跡、上部遺跡などがある（中山・保田1990、安川1981、安川1990）。また、堀坂地区よりもさらに上流の右岸には吉見西山下遺跡がある。林道の建設に伴う掘削によって弥生時代後期から終末にかけての土器がまとまって出土しており、付近に土塙墓の存在する可能性を考えられている（平岡1999）。

古墳時代になると、周辺の各地で古墳が築かれる。草加部工業団地内には鮒込古墳群、篆瀬古墳群（行田1981）など、円墳で構成される多くの後期古墳が存在する。また、単独のものとしては東蔵坊1号墳（安川1981）、緑山A1号墳（中山1986）などがある。堀坂地区周辺の山々の尾根筋や丘陵上にも単独で古墳が点在するが多くは消滅したもの、あるいは詳細の不明なものである。堀坂地区から川を隔てた西側の丘陵部には横穴式石室をもつ寺田古墳があり（中山1986）、石室中の陶棺から須恵器や刀などが出土している。寺田古墳から谷を隔てた丘陵の裾部には高倉大門古墳があり、横穴式石室から陶棺、須恵器が出土している（今井ほか1960）。また、緑山北遺跡、緑山遺跡などでは製鉄炉や炭窯がみつかっていることから、この地域で鉄精錬が行われたことが判明している（行田・平岡1994、中山1986）。

中世に入ると、堀坂地区の北西部にあたる吉見地区の山頂に医王山城が築かれる（新人物往来社編1980）。この山城は南北朝期に山名氏と赤松氏の抗争の中で交互に撃守されたが、その後も尼子氏や毛利氏などによる攻防が繰り広げられている。最終的には、16世紀末に毛利氏と羽柴氏との間に和議が成立したことにより開城、廃絶したと考えられている。現在は曲輪や堀切、石垣などが残る。

このように周辺域には遺跡の存在が確認されているが、工事の対象地区である堀坂地区については、は場整備計画以前は遺跡の空白地帯であった。

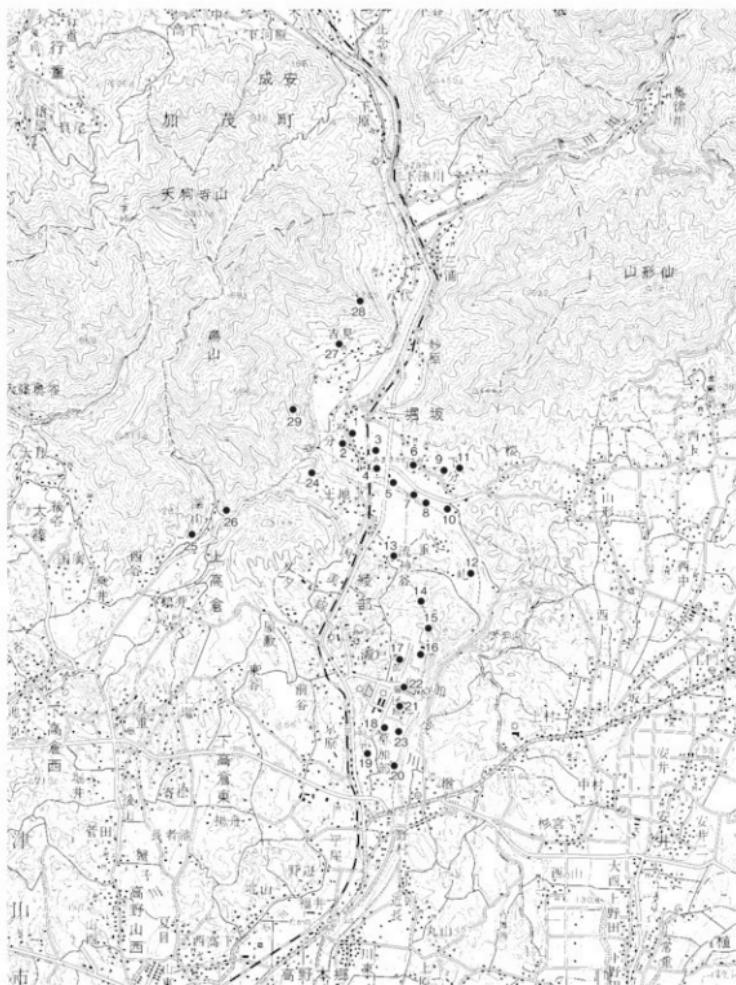
（豊島）

参考文献

今井應ほか「津市山高倉大門古墳整理報告」「1960年度 津市文化財調査略報」第1集 津市教育委員会

今井應「津市綾部東穴田遺跡」「1961・1962年度分 津市文化財略報」第2集 津市教育委員会

今井應1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津市史第一卷 原始・古代』津市史編纂委員会



- | | | | | |
|----------------|------------|--------------|----------------|------------|
| 1. 堀坂耕整遺跡 | 2. 堀坂橋ノ元遺跡 | 3. 堀坂節分田遺跡 | 4. 堀坂南ノ前遺跡 | 5. 堀坂星ヶ坪遺跡 |
| 6. 堀坂大高下遺跡 | 7. 堀坂田中遺跡 | 8. 堀坂宮ノ前遺跡 | 9. 堀坂庄煙遺跡 | 10. 堀坂道通遺跡 |
| 11. 堀坂荒神山古墳 | 12. 穴田遺跡 | 13. 綾部カジヤ古墳 | 14. 古墳(旧綠山古墳群) | 15. 緑山北遺跡 |
| 16. 緑山遺跡 | 17. 緑山A1号墳 | 18. 草加部東藏坊遺跡 | 19. 上部遺跡 | 20. 稲荷遺跡 |
| 21. 斎辻遺跡・斎辻古墳群 | 22. 篠瀬古墳群 | 23. 東藏坊1号墳 | 24. 寺田古墳 | 25. 高倉大門古墳 |
| 26. 高倉深山1号墳 | 27. 京上古墳 | 28. 吉見西山下古墳 | 29. 医王山城 | |

第1図 調査の位置と周辺の遺跡（1～8が調査遺跡）(S=1:50,000)

- 新人物往来社1980『日本城郭体系』第13巻（広島・岡山）
- 中山俊紀1986『緑山遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集） 津山市教育委員会
- 中山俊紀1986『寺田古墳』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集） 津山市教育委員会
- 中山俊紀・保田義治1990『小原B・福荷遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集） 津山市教育委員会
- 平岡正宏1999『吉見林道法面採集の土器』『年報 津山弥生の里』第6号 津山市教育委員会
- 安川豊史1981『東城坊遺跡B地区』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集）津山市教育委員会
- 安川豊史1990『上部遺跡発掘調査報告』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集） 津山市教育委員会
- 行田裕美1980『葉瀬古墳群』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集） 津山市教育委員会
- 行田裕美・平岡正宏1994『緑山北遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第53集）津山市教育委員会

第Ⅱ章 調査経過

1. 調査に至る経過

平成 13 年度から 17 年度にかけて県営ほ場整備事業（担い手育成型）堀坂地区（平成 15 年度から経営体育成基盤整備事業 堀坂地区）が実施されることとなり、津山市教育委員会と、事業者である岡山県津山地方振興局（平成 17 年度から岡山県美作県民局）との間で、対象地区における文化財の取り扱いについての協議を行った。当該地区においては、周知の埋蔵文化財包蔵地はなかったが、これまで分布調査等も実施されていなかったため、遺跡の有無、状況等を明らかにするための分布調査を事前に行った。その結果、対象地区のはば全域にわたって遺物の散布が確認され、工事に先立ち試掘調査を行うこととなった。調査は国庫補助を受けて 2 ヶ年度（平成 12 年度、13 年度）に分けて実施した。

試掘調査の結果、ほ場整備対象地区内の 10 箇所で縄文時代から中世にかけての遺跡の存在が確認された。平成 16 年 3 月末には、調査の成果をまとめた『堀坂地区試掘調査報告書』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 74 集）を刊行した。

試掘調査の結果を受け、岡山県美作県民局より津山市に発掘調査依頼があり、津山市教育委員会が発掘調査を実施した。調査は国庫補助および県補助を受け、ほ場整備対象地のうち工事により遺構面が削平される範囲を対象とし、工事計画に合わせ平成 14 年度から 16 年度にかけて実施した。調査面積は平成 14 年度 1,100 m²、15 年度 210 m²、16 年度 3,800 m²である。

(豊島)

2. 調査経過

ほ場整備の対象となったのは津山市堀坂地内、加茂川と北側の丘陵に挟まれた部分約 39.5ha である。平成 14 年度はほ場整備対象地の中でも小高い丘陵上に位置する堀坂耕整遺跡（880 m²）、および加茂川の形成する段丘上に位置する堀坂橋ノ元遺跡（220 m²）の調査を実施した。調査は平成 14 年 8 月 26 日から開始し、堀坂耕整遺跡、堀坂橋ノ元遺跡の順に進めていった。堀坂耕整遺跡は調査地を水田の区画に合わせて 2 つに分け、西側を A 区、東側を B 区とし、各区において弥生時代後期の建物、古墳時代後期の集落、土坑などを検出した。調査は 10 月 14 日に終了し、翌 15 日からは堀坂橋ノ元遺跡の調査に着手した。弥生時代の包含層を検出し、11 月 19 日にはすべての調査を終了した。

平成 15 年度に調査した堀坂宮ノ前遺跡はほ場整備対象地の東部で、北部の山から南に向かってのびる舌状の丘陵上に位置する。平成 12 年度の試掘調査により丘陵一帯に遺跡が広がっていることが判明しており、そのうちの北側の水田の一部について調査を実施した。調査期間は平成 15 年 7 月 7 日から 8 月 11 日までである。調査面積が 210 m² と狭小であるため遺跡の全容を把握することは困難であったが、縄文時代から弥生時代にかけての遺構を検出した。

平成 16 年度は本調査の最終年度にあたり、

第 1 表 発掘調査経過

年度	遺跡名	面積 (m ²)	合計面積 (m ²)
平成 14 年度	堀坂耕整遺跡	880	1,100
	堀坂橋ノ元遺跡	220	
平成 15 年度	堀坂宮ノ前遺跡	210	210
	堀坂田中遺跡	710	
平成 16 年度	堀坂大高下遺跡	50	3,800
	堀坂呈ヶ坪遺跡	1,720	
	堀坂南ノ前遺跡	120	
	堀坂箭分田遺跡	1,200	

調査対象地の残りすべてにあたる5遺跡、調査面積合計3,800m²の調査を実施した。平成16年5月6日に堀坂田中遺跡から着手し、工事の進行予定に合わせて東から西へと調査地を移動し、堀坂大高下遺跡、堀坂星ヶ坪遺跡、堀坂南ノ前遺跡、堀坂節分田遺跡の順に調査を進めていった。各遺跡の詳細については次章に記しているが、縄文時代から中世にいたる遺構、遺物が検出され、堀坂地区における当該時期の集落の存在が明らかにされた。出土遺物のうち、堀坂田中遺跡および堀坂星ヶ坪遺跡出土の縄文土器についてはプラント・オパール分析を実施し、堀坂星ヶ坪遺跡の堆積物については、花粉分析をおこない、平成17年3月31日にすべての調査を終了した。

(豊島)

3. 調査体制（平成14年度～平成17年度）

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

津山市教育委員会	教育長	松尾康義（～H16.3.31）
		神崎博彦（H16.4.1～）
教育次長		森元弘之（～H15.3.31）
		谷口智（H15.4.1～H16.3.31）
		兼田延昭（H16.4.1～）
文化課長		近藤恭介（H14.4.1～H16.3.31）
		佐野綱由（H16.4.1～）
津山弥生の里文化財センター 所長		中山俊紀
	次長	安川豊史（～H17.3.31、発掘調査担当）
		行田裕美（H17.4.1～、報告書作成担当）
	主任	小郷利幸（報告書作成担当）
		平岡正宏（～）
	主事	豊島雪絵（発掘調査、報告書作成、事務担当）

調査担当の一人である安川が平成17年4月の定期人事異動で教育委員会阿波分室へ異動となつたため、急遽行田・小郷・平岡が報告書作成業務を引き継いだ。

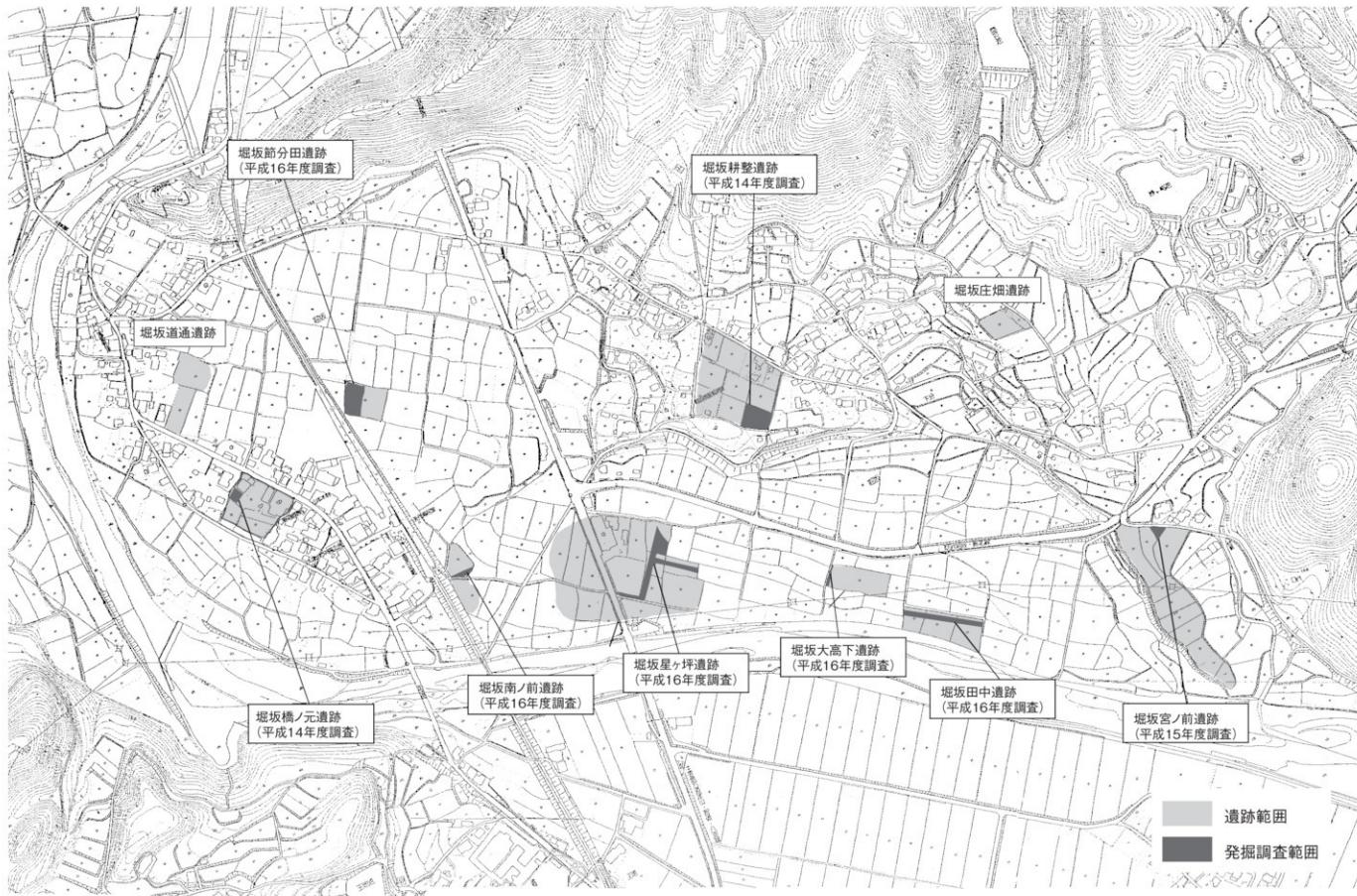
整理作業は野上恭子、岩本えり子、家元弘子、高橋規子が担当した。

発掘作業は社団法人シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である（敬称略）。

有留俊光、有本弘、安藤正弘、稲垣清一、易守、岸部秀郎、木下益穂、佐藤陽一、鈴鹿順一、曾根春雄、田外敦郎、竹花納、谷原知治、本名良一、光岡平八郎、森廣忠治、山本満

発掘調査及び報告書作成の過程において、下記の方々の指導、助言、協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます（敬称略）。

安達正美、安東喬、内田ふで子、左子謙二、兼田延昭、岸本彰三、北川富子、田口博夫、谷原稔、藤田尚徳、本田政子、本郷都、本郷泰、本郷良行、本郷久一、山本光（以上地権者）、秋山道生、伊藤晃、大野薫、岡田憲一、岡本寛久、大橋雅也、亀山行雄、河合忍、木下哲夫、小嶋善邦、高田健一、高橋護、田嶋正憲、濱田竜彦、平井泰男、光永真一、柳澤清一



第2図 発掘調査位置図 (S = 1 : 5,000)

第Ⅲ章 発掘調査の記録

1. 堀坂耕整遺跡

a) はじめに

堀坂耕整遺跡は津市堀坂751、752番地、加茂川の北側の小高い丘陵上に位置する。調査地は2枚の水田であったため、区画に合わせて2区に区分し、西側をA地区、東側をB地区とした。調査期間は平成14年8月26日～10月14日まで、調査面積は880 m²である。

重機により表土を除去したところ、各調査区の北半分は水田の区画を広げるために造成がおこなわれていたことが判明した。造成土は赤褐色土（第2層）で、最も厚いところで1m以上堆積している。造成土をすべて取り除いた後は、人力により掘り下げを行った。その結果、調査区の南半分は地山が削平されており、造成が行われている北半分に遺構が集中して検出された。

b) 遺構（第3図～第7図）

(1) 弥生時代

袋状土坑（第4図）

A地区西側、堅穴住居1に切られる形で検出された。平面形は円形で、直径1.1～1.2m、底径1.5m、深さ0.5mをはかる。断面形態が袋状をなしていることから、貯蔵穴であったと考えられる。

遺物は土坑埋土から弥生土器と考えられる土器片が1点出土した。

建物（第5図）

建物1

A地区西端で検出された。一部調査区外にのびているため全体は分からぬが、1間×1間の建物である。棟方向はN-25°-Wで、規模は桁行4m、梁間2mに復元できる。遺物は出土していないが、埋土の状況から弥生時代のものと考えられる。

建物2

A地区堅穴住居2に切られる形で検出された。1間×1間の建物である。棟方向はN-45°-Wで、規模は桁行3.8m、梁間2mである。

遺物は柱穴の1つ（P1）から弥生土器と思われる小片が出土した。

建物3

A地区とB地区にまたがる形で検出された。1間×1間の建物で、棟方向はN-25°-Eである。規模は桁行3m、梁間2mである。

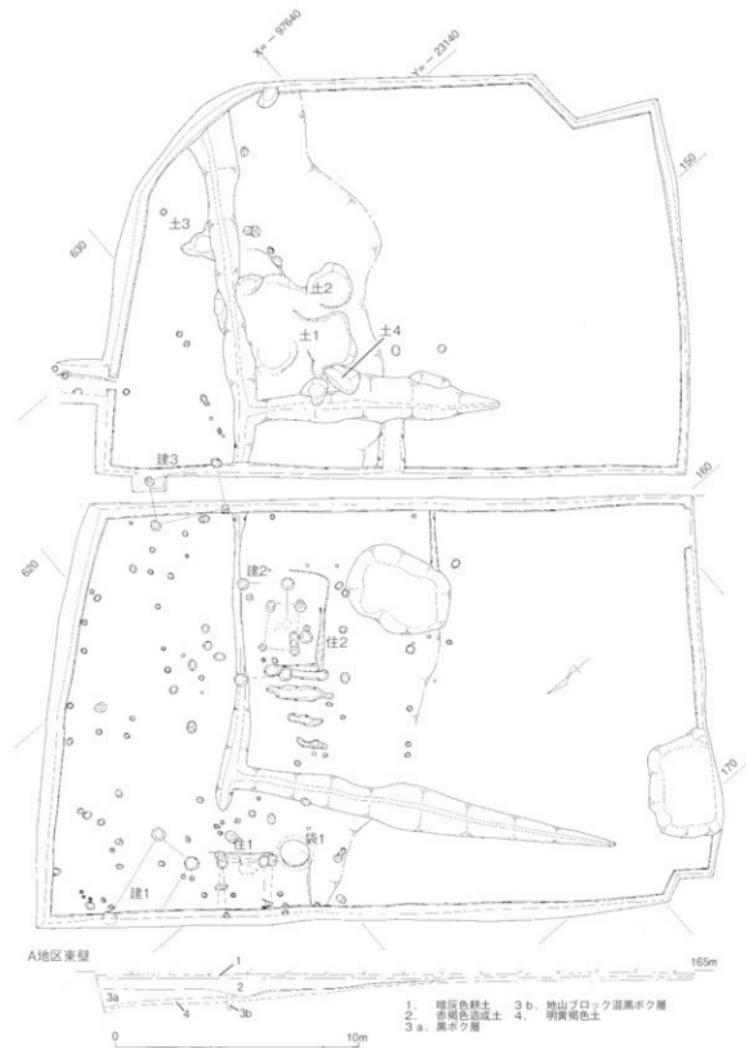
遺物は出土していないが、建物2同様、弥生時代のものと考えられる。

(2) 古墳時代

堅穴住居（第6図）

堅穴住居1

A地区西端、袋状土坑1を切る形で検出された。平面形は方形で、一部調査区外にのびる。柱穴の検



第3図 堀坂耕整遺跡全体図（上：B地区 下：A地区）(S=1:200)

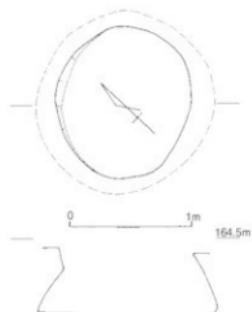
出土状況から建て替えが1回行われていることが分かる。規模は北東辺が4mであるが正確には不明である。内部の2箇所において炉跡と考えられる焼土と炭が検出された。

埋土および柱穴の1つ（P1）から土師器、須恵器、鐵滓などが出土した。

堅穴住居2

A地区北部で検出された方形の堅穴住居で、北半分は削平を受けている。正確な規模は不明だが、南西辺が4mをはかる。堅穴住居1同様中央部に焼土面がみられる。

遺物は柱穴（P3）から土師器の小片が出土したほか、住居床面や埋土中から須恵器、鐵滓などが出土した。



第4図 袋状土坑 ($S = 1 : 40$)

土坑（第7図）

土坑はすべてB地区北半部で検出されている。それぞれ切り合い関係がみられ、形状は不明確である。

土坑1

不整形の土坑である。直径は2m前後、底も平坦ではなく、深さは0.1m～0.3mとやや凹凸がみられる。

遺物は他の土坑に比べ多く、土師器、須恵器、鐵滓などがある。

土坑2

土坑1の東に隣接して検出された。円形の土坑で直径1.5m、深さ0.3～0.4mをはかる。

遺物は土師器の小片が出土したのみである。

土坑3

土坑1、2から後世の溝を隔てた北側で検出された。南側の一部を溝に切られている。平面形は不整形で、直径1m程度、深さは最も深いところでも0.1mと浅い皿状を呈する。

遺物は須恵器の小片が出土したのみである。

土坑4

土坑1の西に隣接して検出された。西側の一部を後世の溝に切られている。平面形は円形で、直径1m、深さ0.1mと浅い皿状を呈する。

遺物は土師器の小片が出土したのみである。

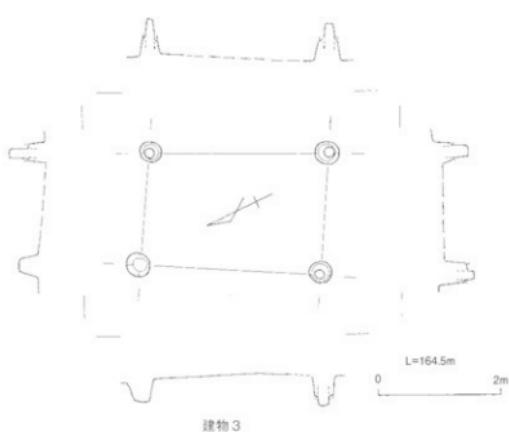
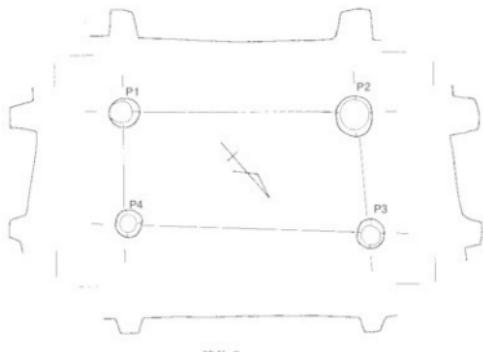
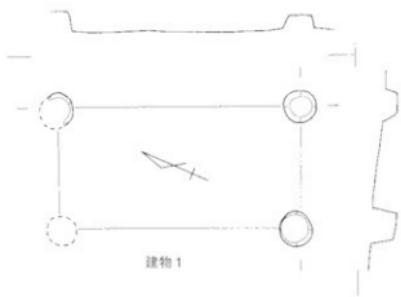
その他

調査区内の複数のビット（小穴）から土師器、須恵器の小片や、鐵滓などが出土したが、柱穴のような性格のものではないと考えられる。

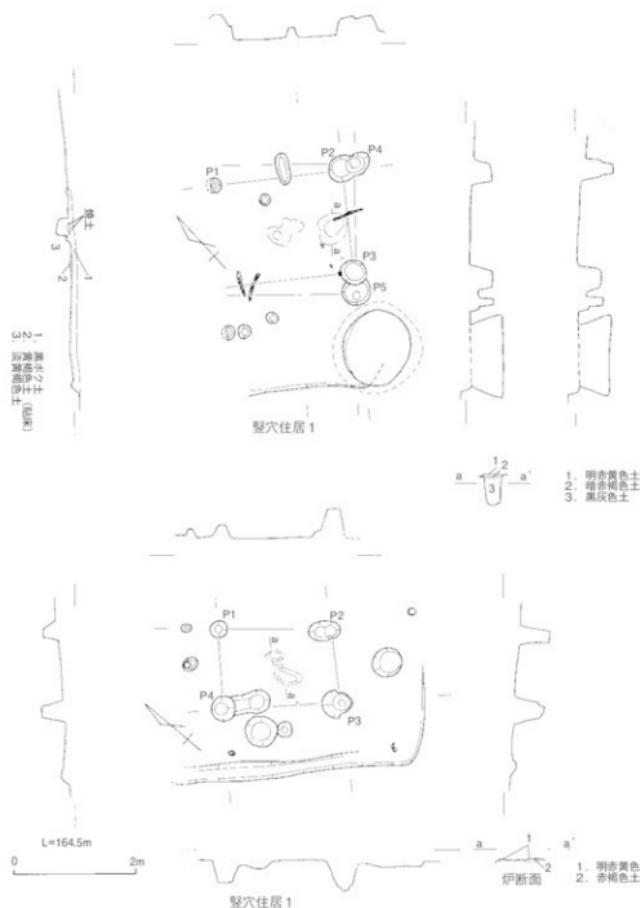
c) 遺物（第8図）

出土遺物は一部弥生時代後期のものがある以外はすべて古墳時代の土師器、須恵器であり、コンテナ2箱分程出土しているが、國化できたものは少ない。

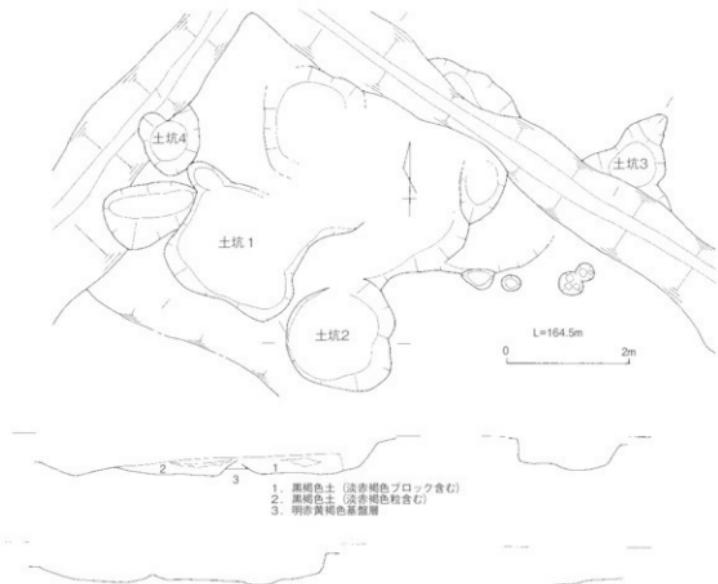
1、2、6は堅穴住居2出土の須恵器で、このうち2、6は床面からの出土である。杯蓋（1）はや



第5図 建物1～3 (S = 1 : 80)



第6図 壁穴住居1・2 (S = 1 : 80)



第7図 土坑1～4 (S = 1 : 80)

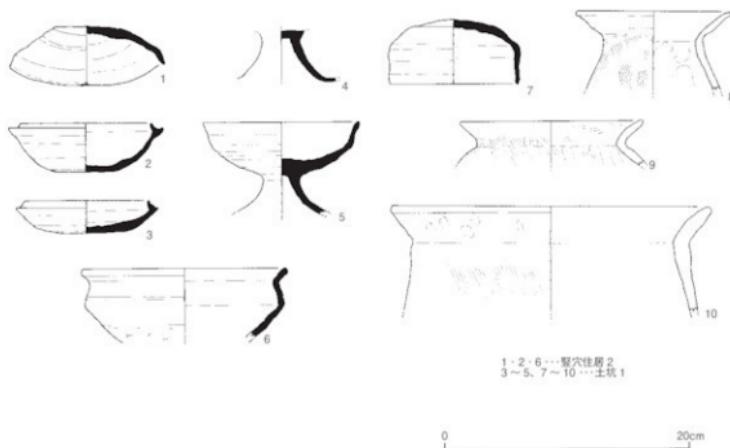
や変形しており、口径 9.4 ~ 12.5 cm、器高 4.8 cm で、天井部周辺のみ回転ヘラ削りがみられる。杯身（2）は口縁部の立ち上がりが内傾する。口縁端部口径 10.8 cm、器高 4 cm。6 は鉢である。口径 16.5 cm、器高 5.8 cm。これらはすべて古墳時代後期後半のものと考えられる。

その他はB地区土坑1出土である。杯身（3）は口縁部の立ち上がりが大きく内傾する。4、5は高杯である。4は杯部を欠いている。器高は残存部で 4.2 cm をはかる。5は脚の一部を欠く。杯の底部はヘラ削りの後ナデが施されている。口径 12.8 cm、器高は残存部で 7.6 cm をはかる。7は蓋の蓋と思われる。天井部周辺のみヘラ削りが施されている。口径 10.4 cm、器高 5.2 cm をはかる。土師器の壺（8～10）はいずれも外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめている。8は口径 12.4 cm、残存高 6.4 cm。9は口径 15.4 cm、残存高 3.5 cm。やや丸みをおびた形状である。10は口径 26.2 cm、残存高 8.4 cm を測る。これらの土器も堅穴住居2同様、古墳時代後期後半のものと判断できる。

d) 小結

堀坂耕整遺跡の調査では、弥生時代後期と古墳時代後期後半の大きく2時期の遺跡が存在することが明らかになった。

弥生時代後期のものとしては3棟の建物がある。遺物がほとんど出土しなかったため同時併存しているのかは不明であるが、3棟の位置関係や規模などから推測すると、これらは同時期のものであると判断してよいと思われる。



第8図 堀坂耕整遺跡出土遺物 (S = 1 : 4)

古墳時代後期後半のものとしては、A地区の2軒の堅穴住居およびB地区的土坑群があげられる。位置関係や出土した土器の時期などから考えると、同時併存していた可能性も考えられよう。また、B地区的土坑群から一定量の鐵滓が出土していることから、鐵生産に関わっていた集落であったと推測される。南側の削平された部分にも遺構が存在していた可能性を考えれば、集落の規模は調査範囲よりも広がっていたものと考えられる。

(鹿島)

2. 堀坂橋ノ元遺跡

a) はじめに

堀坂橋ノ元遺跡は津山市堀坂 215-1 番地、加茂川の形成する河岸段丘上に位置する。調査期間は平成 14 年 10 月 15 日～11 月 19 日、調査面積は 220 m²である。重機により耕土を掘り下げたところ、基盤層である淡灰褐色の砂礫層（第 7 層）が検出された。この層には大きいもので人頭大の河原石が含まれていたことから、掘削は難航した。

b) 遺構（第 9 図）

(1) 弥生時代

包含層

基盤層である淡灰褐色砂礫層まで掘削したところ、調査区西側 3 分の 1 程度の範囲がそれ以外の所にくらべ 0.2 ～ 0.4 m 程度下がっており、その部分に黒褐色の遺物包含層（第 5 層）が堆積していた。包含層の下層は無遺物である黄色砂質土層（第 6 層）がみられ、浅い皿状の窪みを形成していた。包含層の堆積している範囲は調査区北側で 2.5 m、南側で 4 m であり、調査区外に広がるものと推測される。包含層の中からは弥生時代後期の土器片が出土した。

(2) 中世

土坑

調査区南東部に不整形の落ち込みが検出された。規模は不明だが、調査区南東部で東西 2.5 ～ 3.5 m、南北で 7 m みられる。埋土は黒褐色砂質土で、中には多量の河原石が含まれていた。石は大きいもので直径 50 cm 程度ある。土坑は調査区外に広がっており、一部掘削したところ、深さは 0.5 ～ 0.8 m に達することが明らかとなった。このため、土坑全体を掘削することは困難と判断し、東側の壁面に沿った部分のみの検出にとどめることとした。埋土からは勝間田焼の碗や土師器の皿などが出土したことから、中世の土坑と考えられる。

この他、調査区東壁に接する形で浅い円形の土坑や、それを切る溝状の土坑などが検出されたが、出土遺物はなく、時期の特定はできなかった。

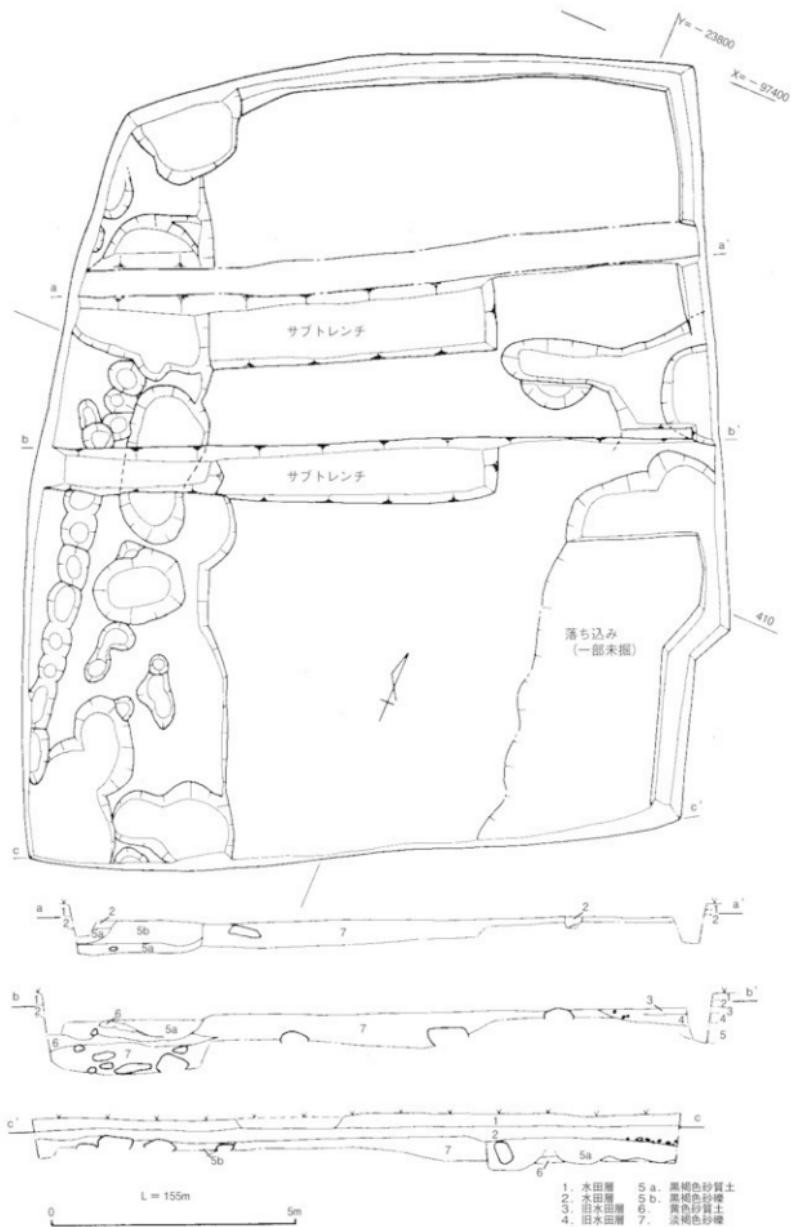
c) 遺物（第 10 図）

遺物はコンテナ 1 箱分出土している。1 ～ 4、8 は弥生時代の遺物包含層から出土したものである。弥生土器は口縁部を斜めに肥厚させる甕で、時期は後期前半である。8 は土鍤である。直径 1.2 cm、長さ 3.5 cm である。

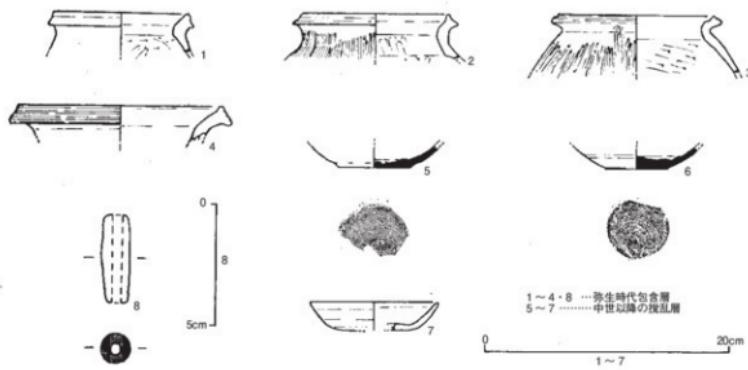
5 ～ 7 はすべて調査区南東部の中世の土坑から出土した勝間田焼および土師器の碗である。5、6 は回転糸切りの痕跡がみられる。

d) 小結

堀坂橋ノ元遺跡では、弥生時代の包含層、及び中世の土坑等を検出した。包含層から出土した土器は弥生時代後期前半のものであることから、近隣に当該期の遺跡が存在した可能性が考えられる。また、中世の土坑の存在からは、この地に中世に集落が営まれた可能性があるが、基盤層に砂及び河原石を多



第9図 堀坂橋ノ元遺跡全体図 (S = 1 : 100)

第10図 堀坂橋ノ元遺跡出土遺物 ($S = 1:4, 1:2$)

く含むことから、当該地は氾濫原であったと考えられ、集落を営むにはあまり適さない地であったことが推測される。

(豊島)

3. 堀坂宮ノ前遺跡の調査

a) はじめに

堀坂宮ノ前遺跡は津市堀坂 1198・1 番地に所在する。堀坂地内に存在する遺跡の中で最も東に位置し、北側の山から南へ舌状にのびる微高地上に位置する。調査期間は平成 15 年 7 月 7 日～8 月 11 日、調査面積は 210 m²である。平成 12 年度の試掘調査により丘陵全体に遺跡の広がりがみられることが判明している。発掘調査対象地はそのうち北側の水田の一部である。重機により耕作土を取り除いたところ、黒褐色土の遺物包含層（第 4 層）の堆積がみられた。その下層である茶灰褐色土層（第 6 層）がこの基盤となる。

b) 遺構（第 11 図・第 12 図）

（1）縄文時代

ピット

調査区内で多数検出されたが、その多くが浅いもので性格は不明である。遺物を伴わないものと、縄文土器が出土したものがある。包含層の底面の落ち込みである可能性もある。

焼土面

調査区内の 4 箇所で検出した。すべて直徑 50～70 cm 程度の円形に赤く変色している。この調査区での出土遺物のほとんどが縄文土器であることや、後述する弥生時代の柱穴列のうちの 1 つがこの焼土面を切る形で検出されていることから、縄文時代のものと考えられる。

（2）弥生時代

柵列（第 12 図）

調査区の北側部分には東西方向に 5 個の柱穴を検出した。西側は調査区外にのびる可能性がある。1 列のみであるため、柵列と考えられる。全長は 9.2 m、柱穴の間隔は 2.1～2.4 m である。柱穴の規模は直徑 30～40 cm、深さは検出面から 25～30 cm をはかる。

遺物は、柱穴のうちの 1 つ（P 3）から弥生土器片が出土した。詳細な時期は不明だが、包含層などから出土した弥生土器から判断すると、後期のものと考えられる。

（3）その他

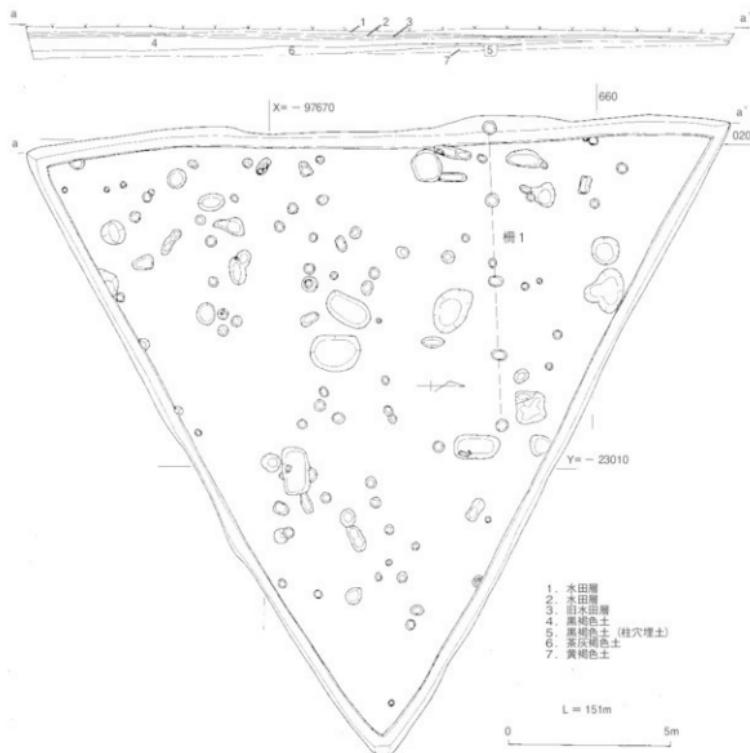
遺物包含層

調査区のはば全域に 10～40 cm の厚さで黒褐色土が堆積しており、この中に比較的多くの土器が含まれていた。層は南に向かうほど厚くなっている。遺物は縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての土器のほか、弥生土器も少量ではあるがみられる。出土遺物の大半はこの遺物包含層から出土したものである。

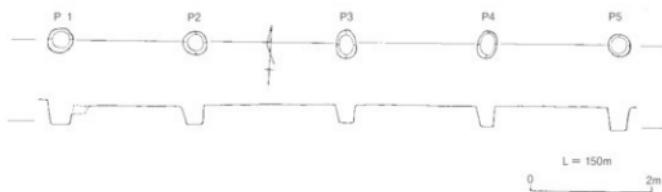
c) 遺物（第 13 図～第 15 図）

（1）縄文時代・弥生時代

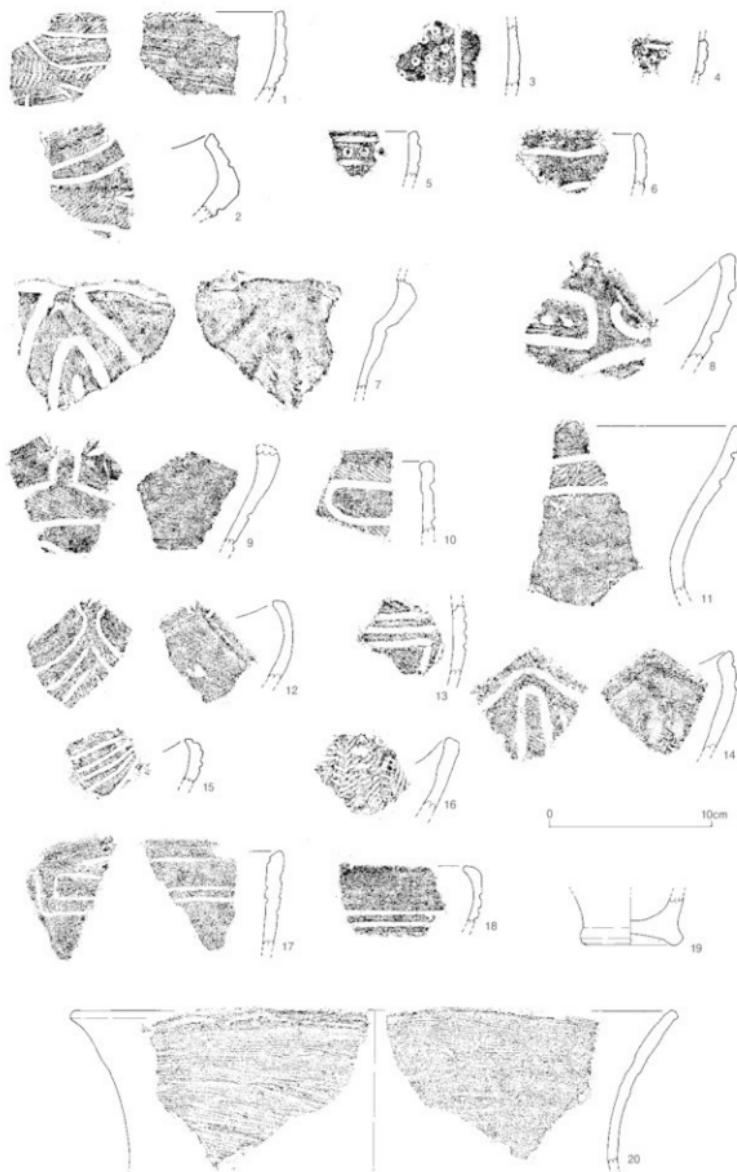
縄文土器（第 13 図・第 14 図）



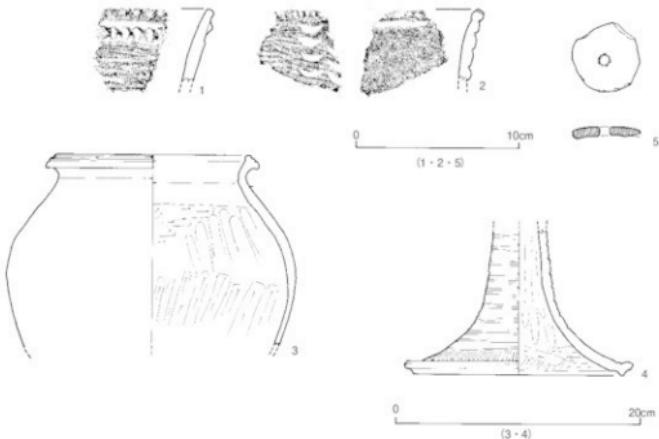
第11図 堀坂宮ノ前遺跡全図 ($S = 1 : 150$)



第12図 棚列 ($S = 1 : 80$)



第13図 堀坂宮ノ前遺跡包含層出土遺物1（縄文土器）(S=1:3)



第14図 堀坂宮ノ前遺跡包含層出土遺物2（土器・土製品）（S=1:3、1:4）

遺物はコンテナ3箱分出土している。掲載したものはすべて遺物包含層（第4層）からの出土である。

第13図には縄文土器を掲載した。一部時期の不明確なものもあるがすべて縄文時代中期末から後期前葉にかけてのものと推測される⁽¹⁾。

1～8、16は近畿地方の中期末の土器型式で北白川C式とされるものである。

1、2は深鉢の口縁である。1は口縁に平行する沈線とその下位に弧状の沈線をつける。沈線の下は縄文を施す。2は波状口縁で、沈線を2条つける。屈曲部直下には三角形あるいは菱形になると思われる文様および沈線がみられる。3～5は竹管文をもつ口縁、胴部である。5は竹管文の上下に沈線を施す口縁部である。竹管文を施す土器は兵庫県たつの市片吹遺跡SB8（泉・玉田1985）や、同丁・柳ヶ瀬遺跡A・B地区（岡崎ほか1985）などに出土例がある⁽²⁾。7は深鉢の胴部で、内側に屈曲する口縁をもつものと考えられる。外面には沈線による楕円形の区画文を施し、内面には外面に施された沈線の凹凸がそのまま表れている。8は波状口縁の深鉢である。沈線による長方形、弧状の区画文が描かれ、長方形の内部には刺突を施す。16は山形口縁の一部と考えられる。縄文を施し、波頂部の両側にタテ方向の沈線を入れ、沈線の中に斜め方向の刻み目を施すものである。

北白川C式は泉拓良によって1期～4期に区分されており（泉・家根1985）、上記の土器はその中でも新相の4期に位置づけられると考えられる⁽³⁾。また、矢野健一は北白川C式の瀬戸内地方の資料との併行関係について、岡山県倉敷市矢部奥田遺跡出土土器を中心に検討しており⁽⁴⁾、口縁部形態や屈曲の有無をもとに2段階に分類している。この分類によれば、「矢部奥田式新段階」併行となる。また、周辺域の最近の報告例としては岡山市長綱手遺跡のものがあり、中でも堅穴住居2、3出土土器に類例がみられる（亀山ほか2005）。

9～15、17は中津式～福田KⅡ式に属するものである（玉田1989、第15回中四国縄文研究会徳島実行委員会編2004）。

9は磨消縄文を施す波状口縁の深鉢である。波頂部から垂下した縄文帯が左右に展開し、その下にJ

字文を描くタイプのものである。10、11も9と同様の磨消繩文をもつ深鉢である。いずれも中津式に属する。12は波状口縁である。沈線が細く、福田K II式に属すると思われる。13は脣部で、3本の沈線がやや鋭角をなして曲折する。14は磨滅が著しいが、口縁端部に沿った形で波状に1条の沈線を施し、タテ方向に楕円形の磨消繩文帯をもつ波状口縁である。文様構成からは中津式の古い段階に位置づけられると考えられる。15は残存部で6本の細い沈線を施し、沈線間に1本おきに刻目をつけるものである。17は窓枠状の磨消繩文帯をもつ口縁部である。広島県福山市洗谷遺跡などに類例がみられ（小都1976）、福田K II式に位置づけられよう。内面には口縁端部近くに1本、やや下がったところに2本の沈線を施している。

このほか、他の土器よりも時期の下るものとして18の鉢口縁部がある。内湾する形状で、端部よりもやや下がったところに沈線、及び貝殻によって連続的に施した刻目がみられる。他の土器よりもやや新しく、彦崎K II式第2段階のものと考えられる⁽⁵⁾。19は鉢の底部、20は外面、内面の両面に条痕を施す深鉢である。

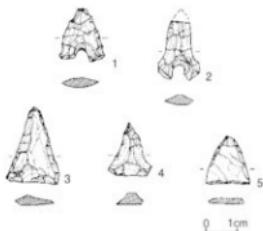
第14図は繩文時代晩期、及び弥生時代の遺物である。1は刻目突帯文をもつ深鉢、2は口縁端部に刻み目を施し、爪形文を平行して垂下させる深鉢である。1は繩文時代晩期後葉、2は晩期中葉に位置づけられる。3は弥生土器の甕である。口縁部を外側に肥厚させ、端面に凹線文を施す。内面は頸部よりやや下方までヘラ削りがみられる。4は弥生土器の高杯脚部である。外面には残存部で櫛描文が10段にわたり施され、その間に刺突文を施す。刺突は4方向にみられる。裾部にはヘラ描文を約4mm間隔で放射状に施す。いずれも弥生時代後期前葉に位置づけられるものである。5は弥生時代の紡錘車で、直径40~44cm、厚さ0.5cmである。

(豊島)

石器（第15図）

1~5はいずれもサスカイト製の石鏃である。1・2は凹基式の鏃で脚部をもつ。両者とも剥離が縁辺から中央まで達し、中央部で後線を形成している。2は先端部を欠く。3~5は平基式の鏃で、いずれも平面形は三角形形状を呈す。3・5は縁辺部だけに剥離が施されているのに対し、4は中央部にまで剥離が及んでいる。いずれも剥離での出土である。

1・2・4は繩文時代、3・5は弥生時代に属するものと考えられる。



(行田) 第15図 堀坂宮ノ前遺跡出土遺物3
(石器) (S = 2 : 3)

d) 小結

堀坂宮ノ前遺跡の調査では、繩文時代中期～後期前葉にかけての土器や石器が出土し、それと同時期のものと考えられる焼土面などがみつかった。遺構はわずかにみられる程度であるが、これらは繩文時代の人々の生活の痕跡であり、当地に集落が形成されていたことを示すものである。津山地域ではこれまで繩文時代遺跡の発見例は少なく、今回の調査は繩文時代集落の一端を知る上で貴重な発見となつた。

弥生時代のものとしては櫛列のみであったが、包含層中から後期前葉の土器が出土したことや、平成12年度に実施した試掘調査でも同時期の遺構が検出されていることから、集落が丘陵一帯に広がって

いたことは明らかであるといえよう。

(豊島)

註

- (1) 中期末から後期初頭の土器については大野薫氏、木下哲夫氏、柳澤清一氏からご教示を得た。
- (2) 竹管文を施す土器については、秋山道生氏にご教示いただいた。
- (3) 1～8の土器をここでは1型式のものとして扱ったが、柳澤清一氏によると、1、2よりも7、8の土器が後出するという。
- (4) 矢野の分類によれば、北白川C式1・2期は「矢部奥田式古段階」、3・4段階は「矢部奥田式新段階」に併行するとしている(矢野1994pp.7.9)。
- (5) 茂崎KⅡ式の細分については、千葉農の分類に基づく(千葉1992)。

参考文献

- 泉拓良・玉田芳美1985『片吹遺跡』(龍野市文化財調査報告書VI)龍野市教育委員会
泉拓良・家根邦多1985「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」「京都大学埋蔵文化財調査報告」3 京都大学埋蔵文化財研究センター
岡崎正進ほか1985「丁・柳ヶ瀬道路発掘調査報告書」(兵庫県文化財調査報告書第30冊)兵庫県教育委員会
小郡隆編1976『洗谷貝塚』福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団
亀山行雄ほか編2005「長绳手遺跡」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告189)岡山県教育委員会
玉田芳美1989「中津・福田KⅡ式土器様式」「縄文土器大観」4 後期 晩期 縄文 小学館
第15回中四国縄文研究会徳島実行委員会編2004「中津式の成立と展開」(第15回中四国縄文研究会発表資料集・集成資料集)中四国縄文研究会
千葉農1992「西日本縄文後期土器の二三の問題—瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題—」「古代吉備」第14集 古代吉備研究会
矢野健一1994「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」「古代吉備」第16集 古代吉備研究会

4. 堀坂田中遺跡

a) はじめに

堀坂田中遺跡は、津山市堀坂 929-1 他に所在する。南流する加茂川が形成する自然堤防上に位置する。平成 13 年度の試掘調査で中世の土坑や複数の柱穴を検出したことから当該期の集落の存在が推測されていた。発掘調査対象地は遺跡範囲のうち、ほ場整備に伴い新設される道路にあたる部分である。調査期間は平成 16 年 5 月 6 日～6 月 17 日、調査面積は 710 m² である。土層は耕作土の下に灰褐色土、暗灰褐色砂質土、黄褐色砂（3 b～3 d 層）がみられ、その下層の黒褐色砂質土層（4 a 層）が遺構検出面である。

(豊島)

b) 遺構（第 16 図）

(1) 弥生時代

溝

溝 1

調査区の北側を西から東に流れる溝である。幅 1.4～2 m、深さ 0.3 m、長さは現状で 8 m を測る。埋土はほぼ 1 層で砂層が部分的に混じる。出土遺物は弥生土器の底部や胴部片のみで図示できるものは無い。そのため詳細な時期は明瞭でない。

溝 2

調査区の南側を北から南に流れる溝である。幅 1.4～2 m、深さ 0.4 m、長さは現状で 22 m を測る。埋土はほぼ 1 層で、出土遺物はほぼ完形に復元できる壺が 1 点出土している。溝 1 と同一の溝の可能性もある。

(小郷)

(2) 中世

建物（第 17 図）

建物 1

調査区の南東端部に建物 2 と平行に並ぶ掘立柱の建物跡である。1 間 × 2 間で 2.6 m × 3.6 m の規模である。棟方向は N - 38° - E である。北西桁行中央柱に接する小ピットから勝間田焼の椀（第 21 図 1）が出土している。

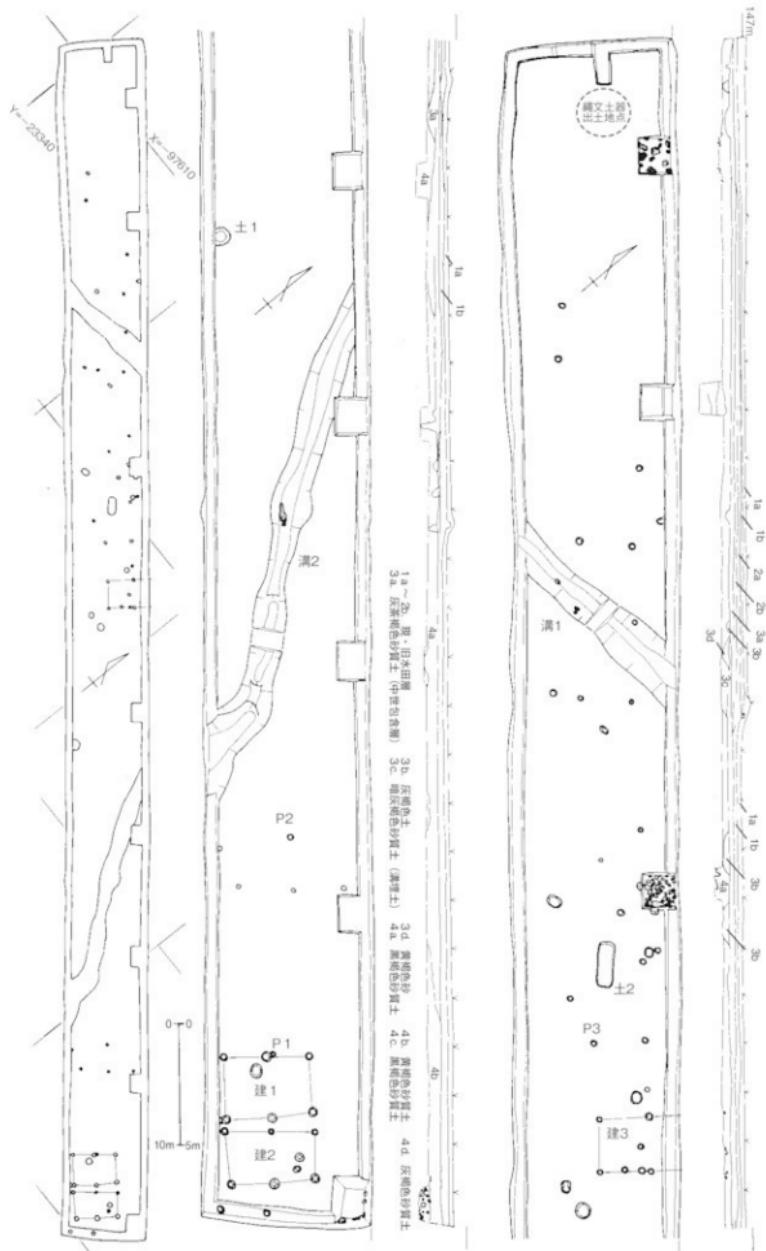
建物 2

建物 1 の南東に隣接して存在する掘立柱の建物跡である。規模は 1 間 × 2 間、2.2 m × 3.7 m である。棟方向は N - 40° - E である。出土遺物はない。

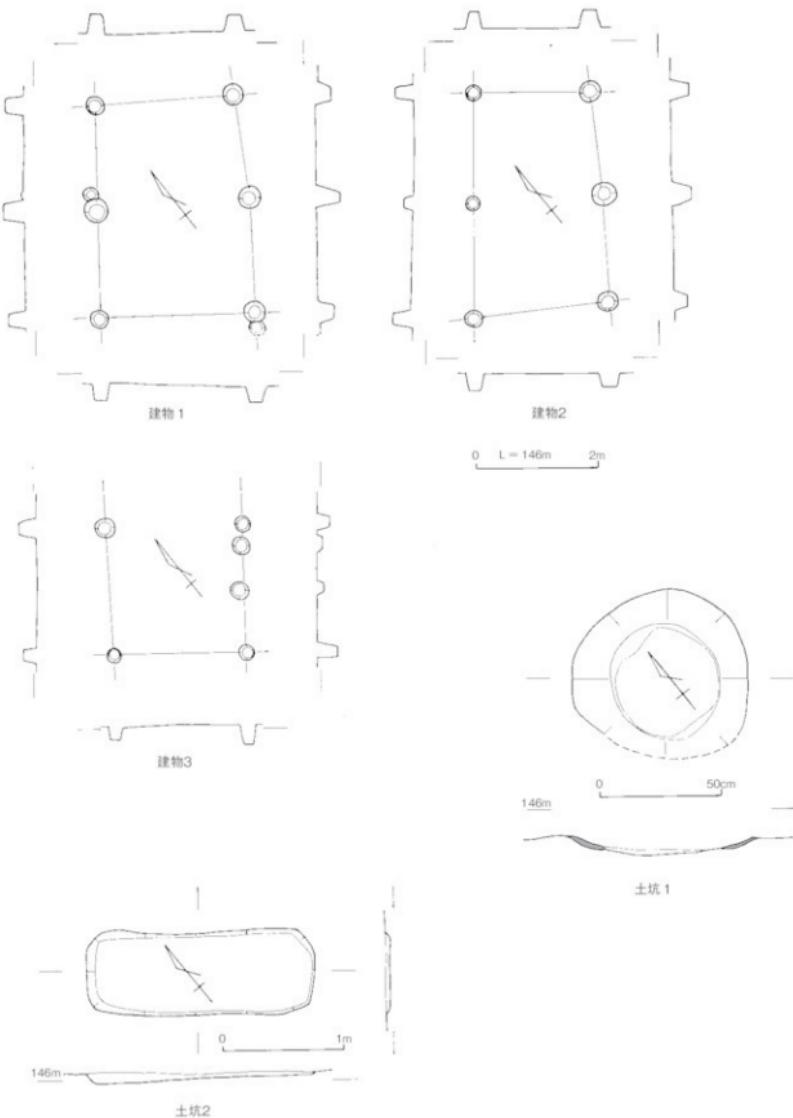
建物 3

調査区のはば中央に位置する掘立柱の建物跡である。北東側が調査区外へのびており、全体の規模は不明であるが、現状で桁行一間以上、梁間 1 間で 12 m × 2 m 以上の規模になる。棟方向は N - 35° - E である。出土遺物は認められない。

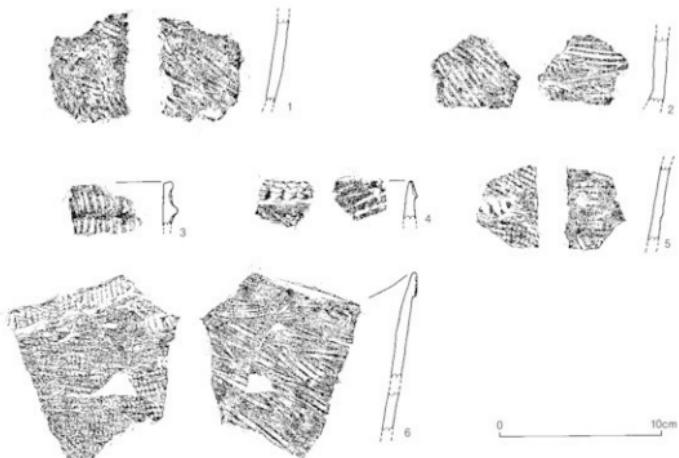
これらの建物はいずれも小規模であるが、建物の方向が一致しており、ほぼ同時期のものではないかと考えられる。



第16図 堀坂田中遺跡全体図 (S = 1 : 400, 1 : 200)



第17図 遺構平面図・断面図 (S = 1 : 80, 1 : 40, 1 : 20)



第18図 堀坂田中遺跡出土遺物1（縄文土器）（S=1:3）

土坑（第17図）

土坑1

調査区のほぼ中央部の南西壁面に接するように位置する直径約50cm、深さ10cm弱の浅い皿状の土坑である。周辺がドーナツ状に赤褐色に焼けており、炉であると思われる。

土坑2

調査区中央部付近に存在する65cm×90cmの隅丸方形の浅い土坑である。深さは最大でも10cm程度である。出土遺物は認められない。

（平岡）

c) 遺物（第18～21図）

（1）縄文時代・弥生時代

縄文土器（第18図）

本遺跡からは、ポリ袋1袋程度の縄文土器が出土している。調査区西端、遺構検出面である黒褐色砂質土層（4a層）から下へ約20cmの地点からまとまって出土した。

1は外面に条痕の後縄文を施し、内面に条痕を施すものである。2は外面に縄文、内面に条痕を施す。3は断面三角形の隆帯の上下に爪形文を施す口縁である。4は口縁部に隆帯を貼り付け、隆帯上に貝殻腹縁による刻み目をつける。5、6は同一個体と考えられる波状口縁の鉢である。口縁端部に隆帯をもち、その上に貝殻腹縁による刻みをつける。外面の地文は縄文であり、口縁から少し下がったところに貝殻腹縁による刻みを三日月状に4条つけている。5の土器にも半月状の刻みがみられる。内面は条痕を施す。類似資料から推測すると全体の形状は砲弾形の深鉢になると考えられる。

これらの縄文土器は縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられるものである。この時期に属する縄文土器は津山市内ではこれまで出土しておらず、岡山県内でも数少ない例であるといえる。

（豊島）

弥生土器（第19図）

溝2出土の1点を第19図に図示している。破片からではあるが、ほぼ完形に復元できる。直口壺に把手がつく、いわゆる水差形土器である。把手部分は剥落しているが、その痕跡が1ヶ所のみ認められる。口径8.8cm、底径5.2cm、器高20cmを測る。口縁部外面には上から3条の凹線、波状文、5条の凹線が施され、胴部上半には斜格子文、波状文、4条の沈線文、下半には連続刺突文、その下はタテハケの後ヘラミガキを施している。把手は胴部の波状文上に取り付けられている。胴部内面は主にハケ調整である。

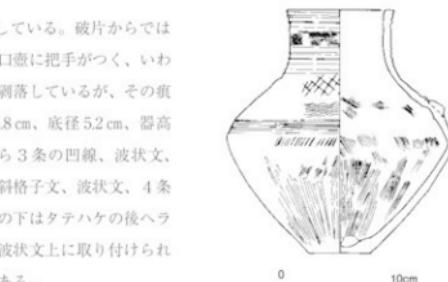
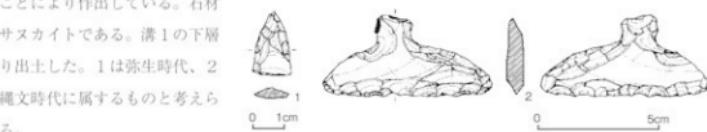
この土器によく似た形態のものが市内の西吉田遺跡（行田1985）から出土しており、それと比べると本例は胴部に丸みがあり外面の加飾が著しい。これが時期的もしくは地域的な違いかは明瞭でないが、本例がやや古相の特徴を示しているのかもしれない。この西吉田遺跡の類例が中期の末頃のため本例もほぼ同時期頃の所産と考えられる。

(小郷)

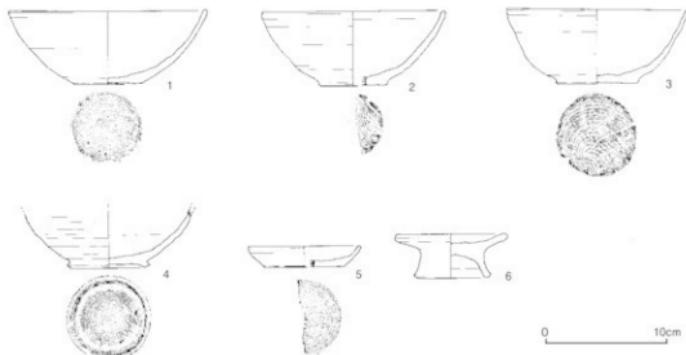
石器（第20図）

1はサスカイト製の石鏸である。調査区のほぼ中央部から遺構に伴わずに出土した。2は石匙である。扁平な板状剥片を素材とし、横長の形状に仕上げている。刃部は表裏両面から細かな剝離を連続して施すことにより作成している。石材はサスカイトである。溝1の下層より出土した。1は弥生時代、2は縄文時代に属するものと考えられる。

この他に、19点の剥片類が出

第19図 堀坂田中遺跡出土遺物2
(弥生土器) (S = 1 : 4)

第20図 堀坂田中遺跡出土遺物3 (石器) (S = 2 : 3)



第21図 堀坂田中遺跡出土遺物4 (中世土器) (S = 1 : 4)

土している。この中には3点の黒曜石の剥片が含まれる。残りの石材はすべてサヌカイトである。

(行田)

(2) 中世

中世土器（第21図）

調査区全域から微量ではあるが中世以降と思われる遺物が出土している。そのうち図示し得たものについて説明を加える。

1は建物1に隣接するP1から出土した勝間田焼碗である。口径16.2cm、器高5.6cmで内外面共にナデ仕上げ、底部は回転糸切りである。焼成がやや甘く、色調は肌色を呈している。

2・3も勝間田焼碗であり、いずれも包含層からの出土である。2は口径15.0cm、器高5.4cm、3は口径14.8cm、器高6.5cmである。この2点は焼成は良好で灰色を呈している。

4の勝間田焼碗は高台を持つ。口縁部を欠くが、底部の径は6.2cmである。

5はP3から出土した勝間田焼小皿である。口径9.2cm、器高1.7cmで焼成はやや甘く、赤味を帯びた灰色を呈する。

6は高台の付く土師器小皿である。口径9.2cm、器高3.6cmを測る。焼成は良好でごく淡い褐色を呈している。

(平岡)

d) 小結

堀坂田中遺跡の調査では弥生時代および中世の遺構が発見された。

弥生時代の溝は小規模なもので、遺物の出土数もわずかであることから、自然河道であった可能性が高い。西側に近接する堀坂大高下遺跡で弥生時代の堅穴住居が検出されていることから、この遺跡との関連性がうかがえる。

中世のものとしては、掘立柱建物3棟のほか、土坑などがある。本調査地よりも加茂川に近接した地点では、試掘調査時に直径18mの土坑がみつかっている。埋土からは多数の勝間田焼が出土していることからも、この時期には加茂川の形成する自然堤防上に安定した集落が営まれたことが分かる。

また、遺構は発見されなかったが、縄文時代早期末～前期初頭にかけての土器が出土した意義は大きく、この地域に人々が最初に生活の痕跡を残した時期を考える上で大きな手がかりとなるものである。

(豊島)

参考文献

行田裕美1985『西吉田遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集）津山市教育委員会

5. 堀坂大高下遺跡

a) はじめに

堀坂大高下遺跡は津山市堀坂 913-1 他に所在する。加茂川の北側沿いの遺跡で、堀坂田中遺跡に西接する。調査地は遺跡の西端部で、調査期間は平成 16 年 6 月 4 日～6 月 22 日、調査面積は 50 m²である。土層は耕作土（1a～2b 層）の下に中世の整地層があり、その下が遺構面である。

b) 遺構（第 22 図～24 図）

主な遺構としては、弥生・古墳時代の竪穴住居各 1 棟、中世の溝 2 条がある。

（1）弥生時代

竪穴住居 1（第 23 図）

住居跡は後世の溝（溝 1、2）により一部削平され、中心部分のみ検出した。そのため全容は明瞭でないが、径 5.1 m 程度の円形の竪穴住居と考えられる。周囲には壁溝がめぐる。柱穴は 4 個検出されたが、東側の調査区外にもう 1 個想定されることから、5 本柱の住居と推測される。中心にある中央穴は円形を呈し、半分は溝 2 により削平されている。埋土はほぼ黒褐色と暗褐色の 2 層で、上層から土器（第 25 図 7）が出土している。中央穴東側の床面には炭の分布がかなり広範囲にみられる。

出土遺物としては土器片が少量ある。

（2）古墳時代

竪穴住居 2（第 23 図）

調査区の西南端で住居跡の一部を検出したため、東側に調査区を拡張した。壁溝の部分的な検出のため正確な規模は不明だが、一辺 6 m 程度の方形の竪穴住居と推測される。壁溝は幅 40～80 cm を測り均一ではなくやや幅広である。柱穴は 2 個検出したが、本来は 4 本柱であろう。床面の中央付近には焼土面が 1 箇所、北側壁溝よりには鉄滓の分布がみられる。

出土遺物には須恵器（第 25 図 8～10）、土師器、鉄鎌（第 25 図 11）、鉄滓がある。鉄滓は柱穴内からの出土である。

（3）中世

溝 1（第 24 図）

溝 2 を切って存在する溝であるが、ほとんどが調査区外である。現状で長さ 17 m、最大幅 0.8 m、深さ 0.24 m を測る。

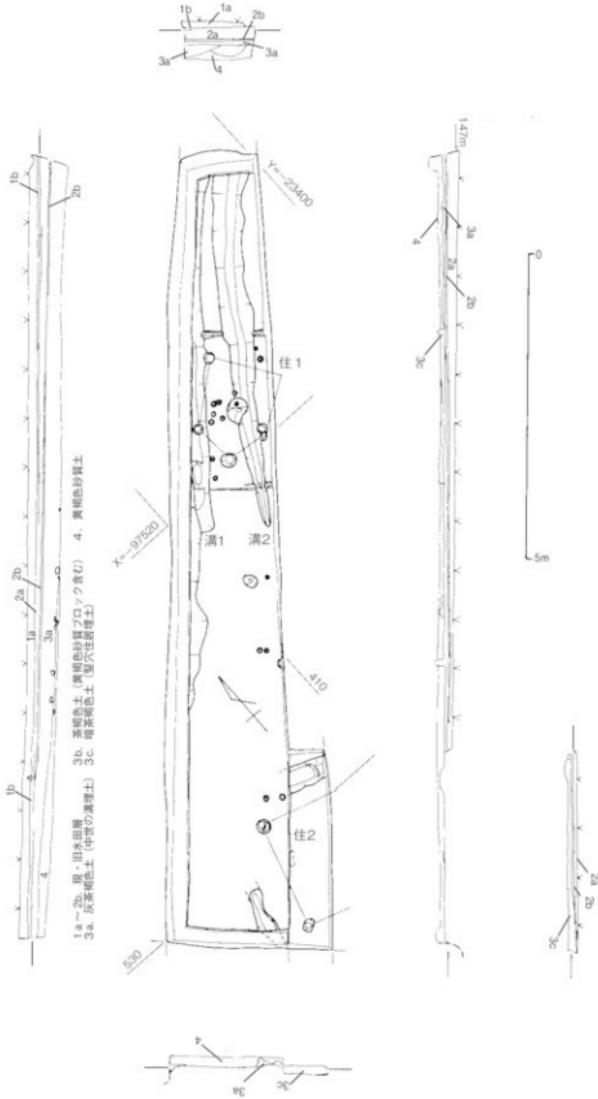
出土遺物は、勝間田焼片が少量ある（第 26 図 1～4）。

溝 2（第 24 図）

溝 1 によって切られ、東側は調査区外に続くが、現状で長さ 11.5 m、幅 1 m、深さ 0.25 m を測る。

出土遺物は、弥生土器（第 25 図 3・4・6）、須恵器（高台付きの杯身など）、勝間田焼（椀）、などがある。

（小郷）



第22図 堀坂大高下遺跡全体図 (S = 1 : 80)

c) 遺物 (第 25 図・第 26 図)

(1) 弥生時代

弥生土器 (第 25 図)

7 点を図示しているがいずれも細片である。1、2、5、7 は堅穴住居 1 からの出土、3、4、6 は溝 2 の出土である。堅穴住居 1 は溝 2 によって切られていることから、後者も堅穴住居の出土遺物である可能性が高い。2 は柱穴、7 は中央穴からの出土である。1～4 は壺などの口縁部で 3 以外の端面外には数条の沈線をめぐらす。5 は器台の口縁部片で外面には 5 条の凹線上に斜格子状の刻目文を施している。6 は鉢の口縁部で内面はヘラケズリである。7 は平底の底部である。

以上の土器は、5 が中期後半頃のもので、それ以外はほとんどが後期前半頃である。

(2) 古墳時代

須恵器 (第 25 図)

図示できた 3 点を載せている。いずれも堅穴住居 2 からの出土である。8・9 は杯蓋である。細片のため口径までは復元できない。口縁部と天井部との境の稜は見られない。10 は杯身で口径 12.4 cm、残存高 2.6 cm に復元されるが、底部付近は欠損する。口縁部の立ち上がりは長さ 1 cm を測りほぼ垂直である。

これら須恵器の時期は、概ね 6 世紀の末頃と考えられる。

鉄器 (第 25 図)

11 は有茎の鉄鍔で、残長 5.6 cm を測り、刃部の先端は欠損する。

鉄滓

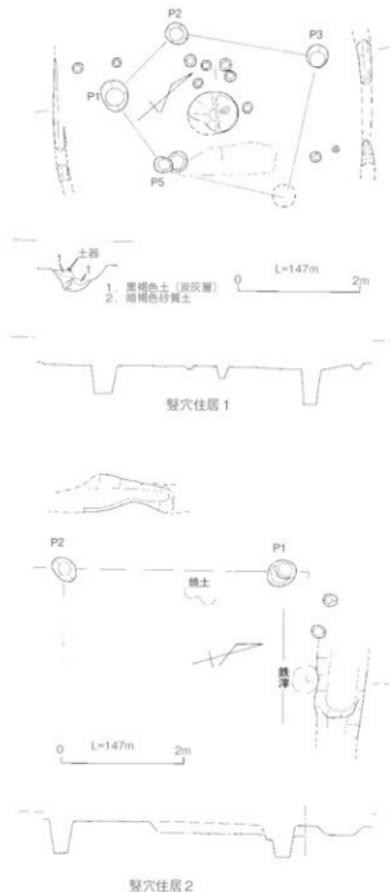
鉄滓は堅穴住居 2 の床面からの出土で総量は約 100 g あり、その形状からいざれも鍛冶滓と推測される。

(小部)

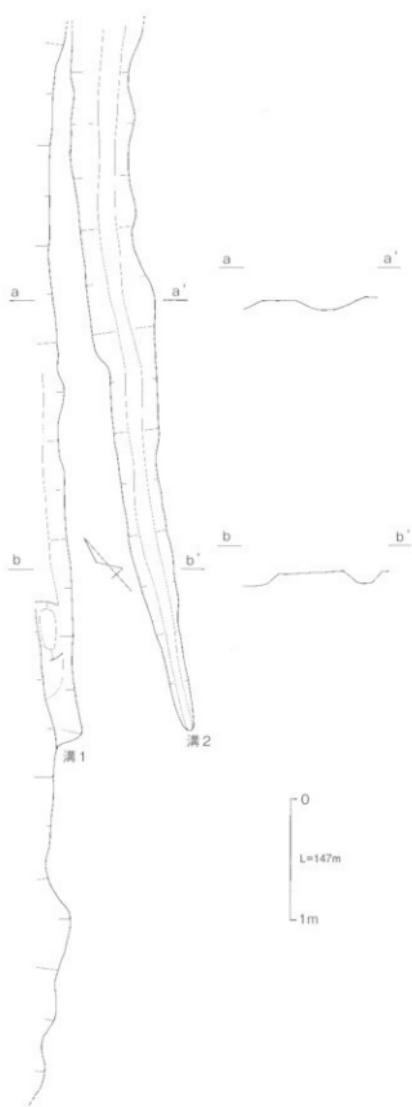
(3) 中世

中世土器 (第 26 図)

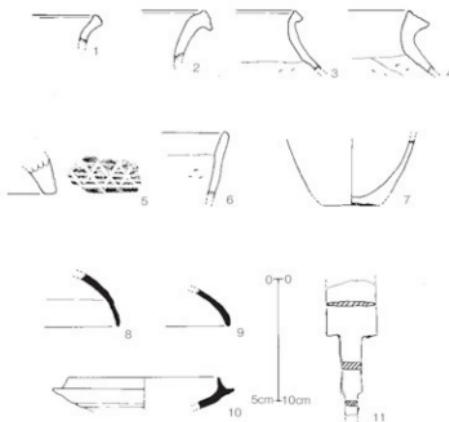
1～4 は溝 1 からの出土である。1・2 は勝間田焼碗口縁部の細片である。全体の大きさは不明であるが口縁部は丸く収まる。3 は同じく勝間田焼碗の底部である。底部はやや平高台状を呈している。いずれも焼成は良好で色調は青灰色である。4 は勝間田焼小皿



第 23 図 堅穴住居 1・2 (S = 1 : 80)



第24図 溝1・2 ($S = 1 : 40$)



第25図 堀坂大高下遺跡出土遺物1（弥生土器・須恵器・鉄器 S=1:2、1:4）

である。器高は2cm程度あり、やや深めである。底部の調整は不明である。

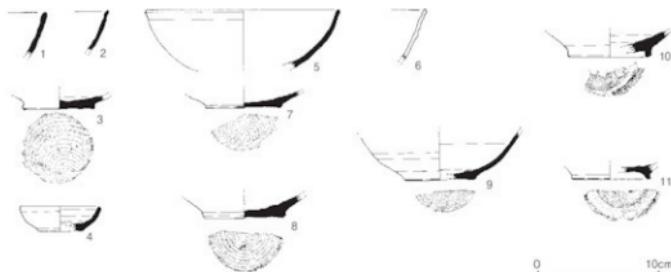
これらの遺物の所属時期は輪の底部の形状から概ね12世紀代と思われる。

5～11は遺構に伴わない遺物である。5・6は勝間田焼輪の口縁部である。6は焼成が土師質に近いため、器壁を白抜きとしているが、形成手法は勝間田輪そのものであり、焼成不良のものと思われる。7～9はいずれも底部片である。いずれも系切り、平高台状を呈している。10・11も勝間田輪の底部片であるが、輪高台の付くものである。

これらの遺物も概ね12～13世紀代に所属するものである。

(平岡)

d) 小結



第26図 堀坂大高下遺跡出土遺物2（中世土器）(S=1:4)

検出した遺構は竪穴住居と溝である。時期は弥生時代から中世であるが調査面積も少なく、遺跡の詳細な概要是明瞭でない。少なくとも住居跡が検出されたため、調査区外に弥生時代後期及び古墳時代後期の集落が広がっているものと推測される。弥生時代については中期の土器がみられることから、この時期の集落が存在している可能がある。古代以降については、中世の溝しか検出しておらず、性格は明瞭でない。これら溝が集落の区画溝である可能性も考えられよう。

(小郷)

6. 堀坂星ヶ坪遺跡

a) はじめに

堀坂星ヶ坪遺跡は、津山市堀坂516番地他に所在する。南側を流れる加茂川が形成する高位段丘及び自然堤防上に位置する。遺跡全体の範囲は西側を走る県道を越えさらに広がっていることが試掘調査から判明している。

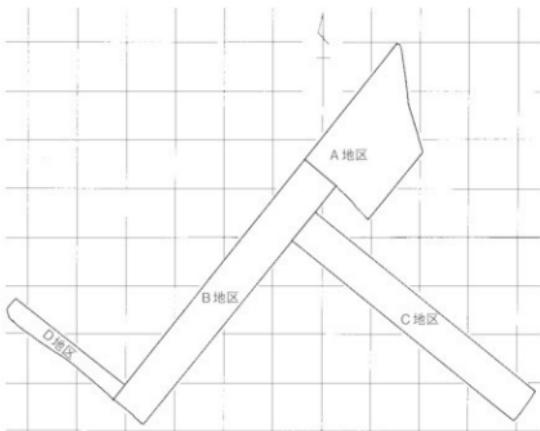
当遺跡範囲における試掘調査では、遺跡の南側を中心として遺物包含層が確認されており、縄文時代後期後葉を中心とする土器が多数出土した。そのため当該期における遺構の存在が推定された。

試掘調査を行った地点で、本調査の対象地と重なっているのはT 2 - 21である。このトレンチは本遺跡の北端部に位置する。試掘調査では明確な遺構は発見されなかったが、縄文時代後期～晩期の土器を含む遺物包含層が確認されている。また、本調査の対象ではないが調査区から約50m東よりの地点に設定したT 2 - 22では、最も深いところで0.8mの遺物包含層が確認されており、縄文時代後期後葉を中心とした土器が多数出土している。このように試掘調査の状況からは南側、つまり加茂川の岸に近づくほど包含層が厚く堆積していることが予想された。

調査区が1,720m²と広範囲であるため、本調査は調査区を北からA地区～D地区の4地区に分割して行い（第27図）、調査区に一辺10mのグリッドを設定した。区画の名称は、東西方向にアルファベット、南北方向に番号を付して、A 1区、A 2区などとした。さらに遺物の出土地点をより詳細にするためそれを4分割し、a～d区とした。これにより最小区画は一辺5mとなり、A 1 a区のように呼称することとした（第28図）。遺物の取り上げはこの最小区画ごとに行った。

調査は平成16年6月29日に重機掘削の後南側のD地区から着手し、B地区からA地区に北上しながら掘り下げを進め、最後に東側のC地区の掘り下げを行った。掘り下げを進めるにつれ、当初の予想よりも遺物包含層に含まれる遺物の量に偏りがみられることが判明した。遺物は南端に近い部分に集中しており、北に向かうにつれて出土量が極端に減少傾向にあった。調査の終了は平成16年9月15日である。

基盤となるのは包含層の下層である黄褐色砂質土層で、以下に遺物は含まれないため、この層まで掘り下げることにより遺構検出を行った。基盤は北に向かうほど上がりつておらず、それにつれて拳大～人頭大の河原石が多数含まれるようになる。この河原石の範囲は南北で4区から7区、東西は調査区の範囲が狭小であるため不明であるが西端はF区までに限られるよ



第27図 堀坂星ヶ坪遺跡調査区割図 (S = 1 : 1,000)

うである。

掘り下げた結果、遺構の密度は極端に少なく、遺物包含層の掘り下げが作業の中心となつた。以下、遺構ごとに詳述する。

b) 遺構（第29図～第31図）

(1) 縄文時代

ビット（第31図）

調査区の北端、A地区で検出した。直径0.4～0.5m、深さ0.2mをはかる。埋土から縄文土器の小片、凹み石が出土した。

調査区内にはB地区南端やC地区東端において浅い

窪みが多数みられるが、いずれも基盤の落ち込みと考えられ、遺構と判断できるのはこのビットのみである。

(2) 弥生時代

溝1（第31図）

A地区のほぼ中央部で検出した。南北方向の溝で、長さ5.2m、幅0.5～1m、深さ0.1～0.3mをはかる。埋土は暗灰褐色砂質土である。形状はいびつであり、深さも一定ではないことから、自然流路と考えられる。出土遺物はないが、次に述べる溝2との関係から、弥生時代のものと考えられる。

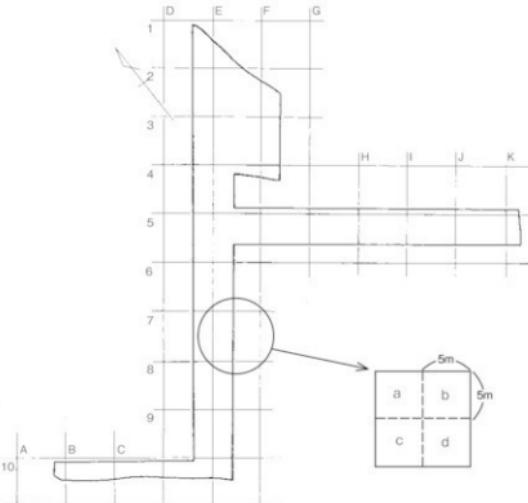
溝2（第31図）

A地区中央部、溝1の南約0.3mの地点で検出した。長さ11.3m、幅0.5～1.6m、深さ0.1～0.45mをはかり南端は調査区外にのびる。埋土は暗灰褐色砂質土である。溝1同様、深さは一定ではない。溝の位置関係や埋土から判断すると、溝1と同時期のもの、あるいは一本の溝になるものと思われる。出土遺物は弥生土器の小片があるが、詳細な時期は不明である。

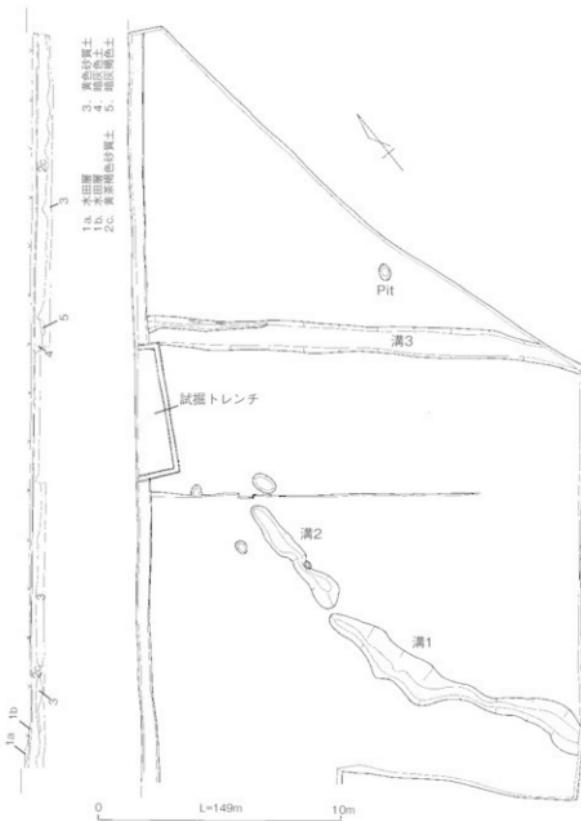
(3) 中世

溝3（第31図）

A地区的中央からやや北よりで検出した。長さ18m、幅1.1m、深さ0.1～0.15mをはかり、両端は調査区外に伸びている。溝は北西部で別の細い溝と切り合っており、土層断面の観察から溝3の方が新しいと思われる。溝の西側は一段低くなつておらず、やや深い溝を溝3が切っている。溝の方向は北西から南東で、現在の地割りをほぼ踏襲している。出土遺物は土器の小片のみであるが、土層の切り合い



第28図 堀坂星ヶ坪遺跡調査区グリッド図 (S = 1 : 1,000)

第31図 堀坂星ヶ坪遺跡A地区全体図 ($S = 1 : 200$)

関係や、埋土の状況から中世のものと考えられる。

(4) その他

遺物包含層

本遺跡のはば全域に堆積する2b層～2c層（暗茶褐色砂質土層～黄褐色砂質土層）には縄文時代後期前葉から晩期にかけての遺物が多数含まれていた。層は上層から下層にかけて漸移的に変化しているため、各層に明確な差異は認められず、遺物の時期によるレベル差もみられなかった。

遺物はA～D地区のすべてにおいて出土した。そのほとんどは縄文土器であり、出土量は地区ごとに大きな格差がみられる（第32図）。

A地区では2c層の堆積が0.3～0.4mみられるが、土器の出土量は少ない。縄文土器のほか、弥生

土器も少量だが含まれている。

B地区は南北に長い調査区であり、場所により出土量が大きく異なる。A地区に近い北よりの区域(D・E 4～6区)では2c層の堆積しかみられず、出土土器もわずかである。これに対しD地区に近い南よりの区域では大量の縄文土器を含む2b層、2c層の堆積がみられ、中でもD 9区からE 9区にかけては圧倒的な出土量である。

C地区は中央で包含層が厚く、この部分では基盤が谷状を呈していたことが一部の掘り下げにより判明した。この谷は南北方向にのびると推測されるが、谷部の掘削は部分的にしか行うことができなかつたため、全容は不明である。包含層の最も厚いところは1.2m程度みられた。

谷部の掘り下げが部分的であったこともあり、出土遺物は少ない。包含層の上層である褐色土層(2a層)、および暗灰色土層(2c層)には縄文土器の他、弥生土器や須恵器なども含まれるが、数量はわずかである。その下層である黒褐色微砂質土層(2d層)は、弥生土器も若干含まれるが縄文土器も出土している。

D地区は調査区の最も南側に位置する東西方向の調査区である。他地区と同様暗茶褐色砂質土(2b・2c層)の遺物包含層の堆積がみられた。層は東側のB地区から西側に向かうにつれ次第に薄くなり、西端では2c層がわずかに確認できる程度であった。

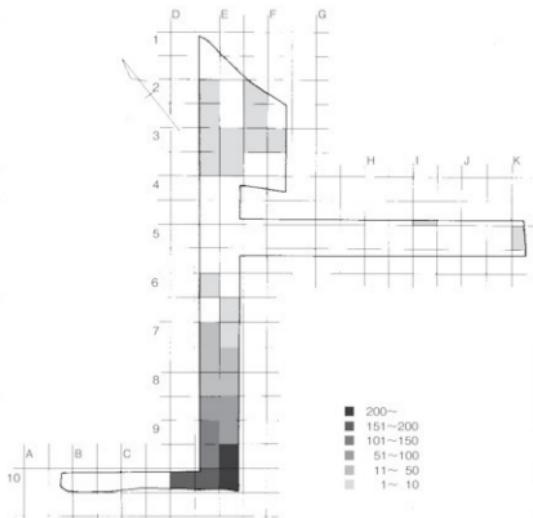
遺物はB地区との境界付近に集中して縄文土器が出土しており、D地区的西半部にあたるC 10区以西は全く出土しなかった。

c) 遺物

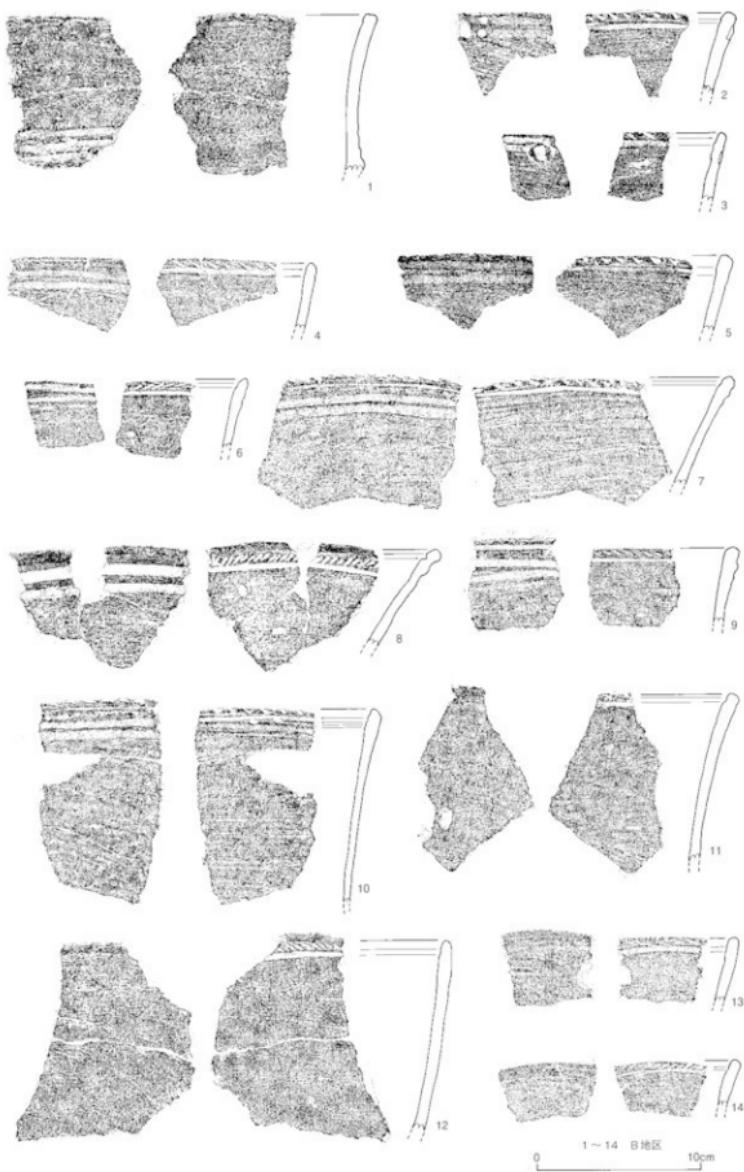
本遺跡の出土遺物のほとんどは包含層中のものであり、遺構に伴うと判断できるものは極めて少ない。包含層出土遺物の大半はB地区南端およびD地区東端に集中しており、他地区との出土量をはるかに凌駕する。包含層は基本的に1層で、その中で下層にいくほど暗茶褐色砂質土から黄褐色砂質土に色調が変化している。先述したように、層位による時期の違いはみられなかったため、縄文土器についての記載は層位ごとに分けるのではなく、一括して取り扱う。鉄器・石器については、地区ごとに記載する。

(1) 縄文時代・弥生時代

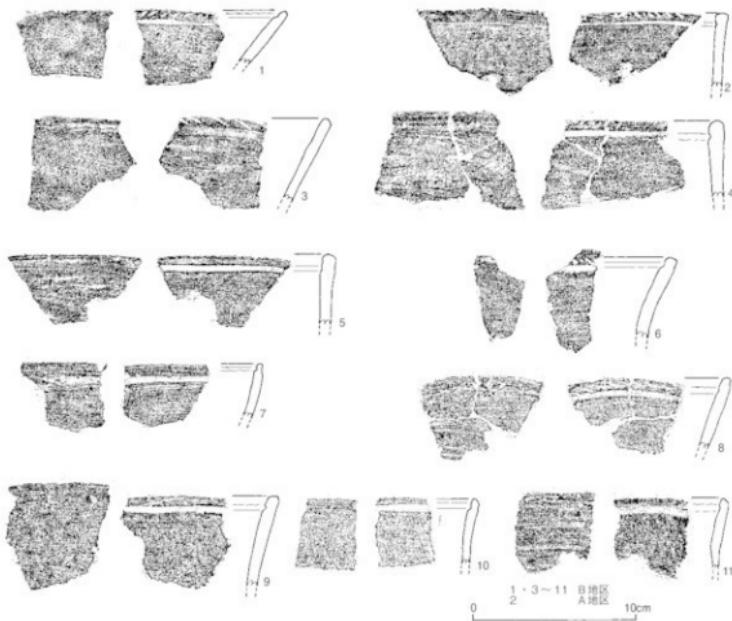
縄文土器（第33図～第



第32図 縄文土器の出土分布 (S = 1 : 1,000)



第33図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器1 (S = 1 : 3)



第34図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器2 (S=1:3)

43図)

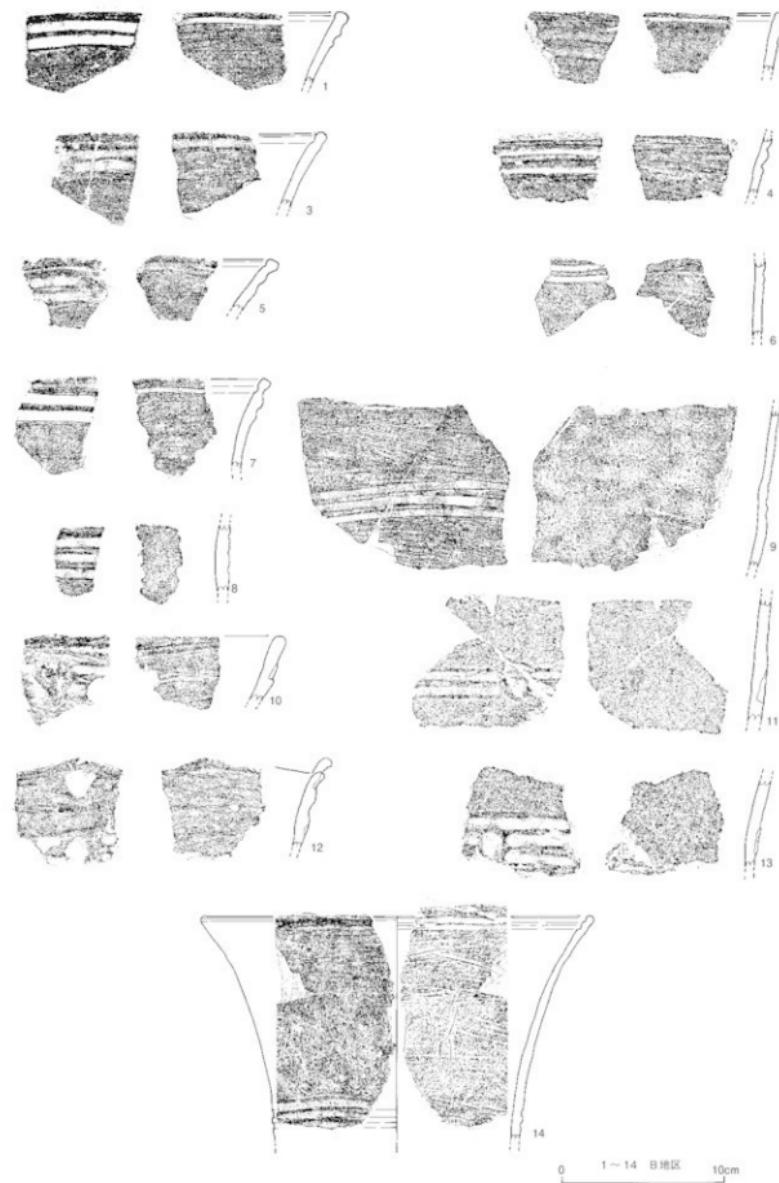
縄文土器についてはB地区のものが大半を占めるため、地区ごとではなく、一括して掲載する。

第33図、第34図は口縁部の内面に沈線のあるもので、沈線と口縁端部との間に斜め方向の刻目のある鉢を基本とする。

第33図はすべてB地区南部の土器集中地点からの出土である。1は胴部外面に凹線を施すものである。2～10は口縁部外面に巻貝による凹線を施すもので、幅広の凹線を2条施すものが大半である。沈線内はナデ、あるいはミガキを施している。2は巻貝による圧痕がみられ、その横に上下に刺突をしている。3も同様の巻貝圧痕である。10は内面の凹線部分に2箇所刺突を加えている。11～14および第34図は、口縁部内面が沈線+刻み、あるいは沈線のみで、外面は無文のものである。第33図2のみA地区からの出土である。調整は、外面は条痕をそのまま残すものとナデを施して仕上げたものとがみられ、内面は平滑に仕上げたものと条痕を残すものとがみられる。

第35図～第37図は外面のみに凹線文を施すものを基本とする。

第35図は口縁が屈曲せずに斜め上方にのびる鉢で、すべてB地区からの出土である。1～3、5、7は口縁部外面に凹線を施し、内面端部に1条の凹線を施すものである。3は凹線上に粘土が貼り付けられていることから、巻貝圧痕を施すものと考えられる。4は外面の凹線がやや強く施されており、断面形が「く」の字状である。9は胴部に巻貝による凹線が3条施されたものである。凹線内の条痕が明瞭に残る。10～13は外面に巻貝による扇状圧痕のある口縁部および胴部である。12以外は粘土貼り付



第35図 堀坂星ヶ坪遺跡包含層出土縄文土器3 (S = 1 : 3)